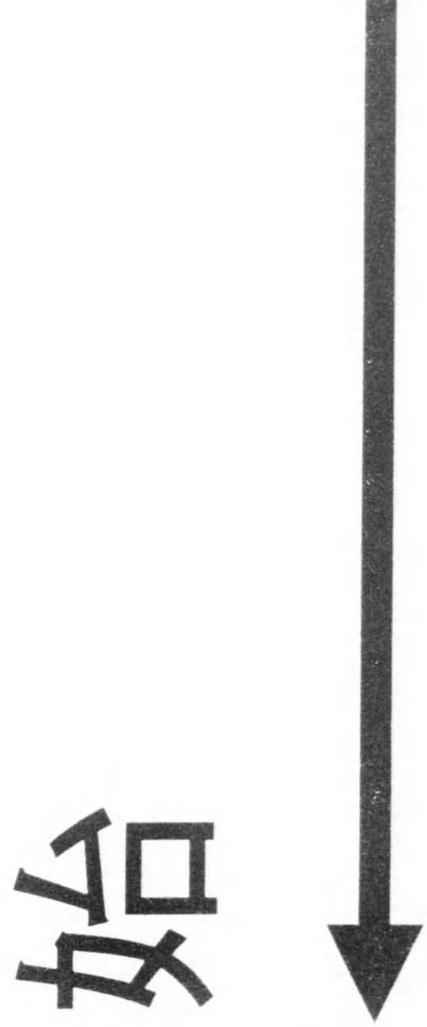
5441
145



2.3.16

一国残帯物語

549-145

はしがき

今より十年前、嘉一坊が退屈まぎれに書き散らした天下の迷文、破れ行李の鼠の巣の中に散らばつて居つた原稿を拾ひ纏めて、此處に一冊を作り友人諸君に頒つ。藥にもならず、さりとて毒にもならず但し讀んでも肩の凝りぬことだけは保險付なりと、嘉一坊齋戒沐浴謹で告す。

大正十五年夏

肥後砥用の山中にて
澁團扇をバタつかせつゝ

廣瀨嘉一坊

大蔵
15. 10. 23
内交

目次

一、一圓紙幣物語……一
上編……三五
中編……六六
下編……九五
一、屁理屈……一一〇
一、呈する書
一、臺所のお鍋君に……九九
玄關番の書生より……一〇四
二、若き奥様へ
下女お鍋より……一〇七

三、藝者裙に　百姓の悴より……一〇四
四、若き奥様に　元の女中竹より……一〇七
五、お客様に　藝者より……一一〇
六、俥夫君に　田舎紳士より……一一二
七、慈善行商人に　田舎の青年より……一一四
八、馬車挽君に　馬車馬より……一一七

以上

一圓紙幣物語

上編

（一）

吾輩は一圓紙幣である。生れは大日本帝國政府大藏省印刷局、そして日本銀行の玄關から此娑婆へ飛び出してからやがて十年になるのだ。今では全面垢に汚れてふけ立ち、そして裏の脊筋には郵便切手の餘りで盛んに清爽を貼られて居るが、ヘン之でも正眞正銘の一圓札、威張つたものだ。五十錢銀貨などは妙に氣取つていやにピカ〳〵光つて居やがるけれども二枚やつて來なければ吾輩一枚の力はない。全身の垢や脊筋の破れ、之は吾輩が十年の間人間なるものゝ世界に苦戰奮鬪を重ねた名譽の負傷である。破れても裂けても武内大臣の價値は變らぬ。

人間界を眺めると、晴路を取つたり公金を失敬したりするよふなやつが、役人に化けて威張つて居つ

たり。コツソリと主人の金を胡麻化すよふなやつが正直な番頭君に化けて居つたり、藝者が丸髷に化け役者が紳士に化ける。マルデ化物屋敷のよふな有様だが、どんなに化けたとて人が不思議とも思はぬ。こゝになると吾輩などは威つたものだ、苟くも不心得なものがあつて一寸でも吾輩仲間の紙幣に化けでもしやがつたら吾輩の左右の股に書いてある通り『兌換銀行券の僞造變造に係る罪は刑法僞造紙幣の各本條に照して處斷す』と早速神妙にお縄頂戴、監獄住いを仰せ付られる。痩ても枯れても天下通寶の一圓札だ。吾輩も今では隨分見苦しい皺苦茶姿になつては居れど、之でも日本銀行から飛び出した時には、それこそ觸つたら指が切れるよふなパリ〳〵の立派な紙幣であつたのだ。過去の事を考へると嬉しかつた事悲しかつた事、腹が立つた事、おかしかつた事など、隨分いろ〳〵な目に遇ふた。可愛らしい京の舞子の小さい紙入の中に香水の香を嗅いで眠つた事もあるが、亂暴な學生の財布の中にグル〳〵と丸められて一夜を泣き明した事もある。醉漢の懷中に這入つて居た爲め、川に落ち込んだ時の苦しかつた事。吾輩一枚の爲に夫婦喧嘩が起り、そして癇癪持の主婦さんから危く眞つ二つに引裂れよふとした時の恐しかつた事。イヤ十年の過去の經歷、それは隨分波瀾に富だものだ。而し今此處で十年間の經歷を一々こまかに話せよと云ふのはそりや無理だ。考へて見玉へ。過去十年人の手から手に、財布から財布に、一日として安閑として居つた事なく、其間何千人の掌に戴せられたか、それさえ數へると云ふ事はとても出來ぬのだ。

(二)

吾輩の姓名か、一が苗字で圓札が名、號を紙幣と稱し、そして立派な肩書を持つて居る。肩書と云つたら野卑な人間輩はすぐに正何位勳何等など〻思ふだろうが、吾輩の云ふのはそんな馬鹿氣た肩書ぢやない、吾輩の右肩には『二三三』左の肩には『八九五二一九』と云ふよふな文字がある、之が眞の肩書なるものじや、此頃吾輩を見るとスグに圓助と呼ぶやつが居る。苟くも大日本帝國政府の紙幣に向つて、湯屋の三助見たよふに圓助など〻失敬な名を勝手に付るやつは甚だ以て不都合千萬な人間共だ。吾輩を圓助など〻勝手に呼ぶやつ等を一々觀察すると要するにどいつもこいつも世の中の穀潰しのよふな顏付して居るやつ共ばかりだ。『僕此頃財政缺乏だ、君一寸貸て呉れぬか、ナーニ圓助一枚でい〻さ』と平氣で借錢するやつの顏を見ると、大抵親の脛かぢりの青書生、未來の放蕩學士。『わたし田中はん旦那は大好よ、今晩皆に圓助一枚づ〻奮發んでよ』なんて黄色い聲を出す奴さんの

御面相を拜見すると、何れも白壁に夕日がさしてるよふな白粉で世を渡る女。

『オイ八公、飲もふか』『源公か大分景氣がいゝよふだな、ヤア君が持つて居るのはそりや圓助ぢやないか』などぬかすやつの顏を見ると、妻子が餓ゑるのもお構いなしに、汗水流して働いた金を毎日ガブリ〳〵と飲む連中だ。而し吾輩は今更左樣な穀潰し共を攻擊する事はやめよふ。

吾輩横四寸八分縱は僅かに二寸八分、体軀元來小なりと雖も昨は大阪に在り今日は名古屋に飛び、而して其夕には岡山に來るなど、其變幻出沒は當底人間輩の企及する處にあらず、日本全國吾輩の足跡を印せざるの地は殆ど無いといつてもいゝのだ。どれ之から吾輩最近の消息を少しばかり話す事にしよふ。

吾輩は此春は東京で暮し、それより京都大阪地方を轉々し、暫く奈良縣下を遊歷し、轉じて名古屋に入り、廣島山口を經て先月初め久々振りに九州博多の地を踏んだのだ。何日であつたか忘れたが兎に角今にも雨が降り出しそふな馬鹿に蒸し暑い晩であつた、吾輩は山口縣から商品取引にでも來たらしい四十歲格好のハイカラ男の懷中に鎭坐ましまして、市内をぶらついて居つた處が突然、吾輩紙幣等の居城たるハイカラ君の紙入を鷲づかみにして飛び出した男がある。紙入ぐるみに失敬するやつ

ハハァこいつが所謂チボと云ふものだなあと吾輩早速鑑定した。勿論其紙入の中には拾圓君五圓君をはじめ、總勢百圓近く吾輩と共に這入て居たのだ。一寸の間に百圓の純益……吾輩はつら〳〵考へた成る程人間と云ふ動物にはいろ〳〵職業もあるけれ共、チボと云ふのは隨分奇拔な商賣だなあと思つた。吾輩は愈々チボ君の懷中に轉宿して居るのだ。吾輩も過去十年には、隨分いろんな人間の手に渡つたが、チボ君の懷中に這入つたのは帶封切つて以來、其日が全く始てであつた。チボ君はやがて附近のそば屋に這入つた。そして二三杯ザラ〳〵と搔き込み、勘定六十五錢とあつたのに、五十錢銀貨二枚ポンと投げ出し、女中が『お釣を……』と云つたのを耳にもかけずプイと戸口を飛び出した。成る程チボ君は肝が大きい、偉いものだと吾輩はつく〴〵感服した。而し此算用で行つたら六圓五十錢の勘定には十圓札を投げ出さねばならぬ、六十三圓の買物には百圓拂つて歸るだろふか、隨分妙な人間だなあと吾輩は思つた。チボ君は其夜の急行で、而も靑切符のお客樣で熊本驛に現れたのはまだ薄暗い午前四時何分、金緣眼鏡にパナマ帽、紗の夏羽織に小形の藤のステッキと云ふ服裝、悠々とプラットホームを出で俥に打乘り洗馬橋附近〇〇旅館へ御着となつた。

（三）

裏二階八疊の部屋に案内される、女中が來る、帳場が來る、何れも頭を五六回疊に摺り付けて盛んにお世辭を浴せる、お世辭を浴せるのはいゝが、此頃表替をしたばかりに見る〻る新疊にこんなにペコペコ頭でこすられては疊が損じて仕舞ふだろふ、こんな不經濟な帳場や女中を飼つて置く御主人こそ迷惑だなあなどゝ吾輩つくゞ〳〵思つた。チボ君は厭に氣取て、『餘り早く來て種々迷惑をかけて濟まないねゑ』と言つて、紙入から吾輩と吾輩の同僚の圓札二枚を抽き出し、女中と帳場君の前にポイと投出した。吾輩は帳場君の膝の前にピラりと坐つた。帳場君は兩手で吾輩を取上て額に押當て、今度は七八遍叩頭をした、叩頭は勝手にしてもいゝが其度毎に吾輩を上下するので何だか眩暈がするよふになつて甚だ迷惑だ。叩頭の數が前後合せて十四五度にもなるであろふ、十五度の叩頭に一圓貰ふとすれば叩頭一度が六錢六厘六毛と爲る、成る程いゝ商賣だなあと思ふた。而し之も多分吾輩を圓助と呼捨にする手合であろふ。折角チボ君と交誼を結び、そしてチボ君が向後の發展の模樣も見たかつたけれども、吾輩は既に帳場君の懷中に轉宿して仕舞たから仕方がない。吾輩は愈々帳場にかしこまつた

帳場君は年齢三十七八、薄い髪を左の方から右に美麗に分けそして眼が小さく鼻の赤い處になかなかの愛嬌がある。帳場に座りながらグラ〳〵居眠りを始める、先刻の叩頭の疲れであろふ。午後の二時頃になつてノコ〳〵這入つて來た一人のお客さんがある、二三十年前に流行つたよふな古びた山高帽に色のさめた夏羽織着用と云ふ至つて風采の粗末な五十歳ばかりの鼻髭君だ。玄關口に立ちながら間が空いて居るかとの御意。船漕ぎ最中であつた帳場君はボカリとした調子でジロ〳〵鼻髭君を見て居たがやがて、右手で頭を搔きながら『お生憎樣、へゝー丁度其――』と一度叩頭をした。『一間も空いて居りませんかな』と髭君が重ねて問ふた、『へゝー、丁度其――』と帳場君又一つ叩頭をした、而し今度の二つの叩頭は十三錢三厘には成らなかつた。髭君はノソ〳〵と出て行つた。其後姿を眺めて居た帳場君は小さい眼を一層小さくしてヒヽイと笑つた。而し何がヒヽイだか吾輩には一向理由が分らなかつた。それから五分間と立たぬのにガラ〳〵と俥が着いた。今度のはバナマ帽に脊廣服、それに夏マントと云ふ至極御念の入つたハイカラの金緣眼鏡君だ、帳場君は一眼見て玄關に飛び出し續け樣に五つばかり叩頭をした、女中君が走つて來る、女將君が來る、何れも叩頭の連發をやる、帳場君が『十三番へ御案内――』と云ふと眼鏡君の鞄も毛布も裏二階へ運ばれる眼鏡君は其後から悠々

と從いて行つた、而し今度は帳場君ヒヽイと云つて笑はなかつた。先刻は『お生憎様丁度其〳〵――』であつたのが、五分間立たぬ間に空き間が出來て『十三番へ御案内――』となる、不思議な屋敷だなあと吾輩は思つた。

（四）

吾輩は其夜九時頃より帳場君に連られて、新市街の方へブラリと出かけた。帳場君はやがて△△牛肉屋の暖廉をくゞつた。眼のパッチリした口の稍々廣い十八九の面長の女が來て『アラ仙さん、此頃どふして顔を見せなかつたの、嬉れしいわ、』と脊中をピシヤリと打つた。吾輩は此帳場君の名が仙さんなることを始めて知つた。而し吾輩は此女には驚いた、苟くもお客さんたる我が仙さんを捕へて叩頭一つもせずに無屈で脊中を叩くなんて、甚だ以て不都合千萬だ、それに仙さんも仙さんだ打たれたまゝ平氣で二階へ上つて行く。仙さんの坐つた部屋は、十六燭の電光が汚れた疊を照らし、そして何となく陰氣だ、仙さんは其不都合なる女中を相手にチビリ〳〵飲み初めた。そして仙さんは能くしやべる。自分が來てから今の宿屋の評判がよくなつたとか、自分ももふ第一銀行に五百圓ばかり貯金が出

來たとか、どふせ近い内には妻帶をして世帶を持たねばならぬとか、仕舞には宿屋の亭主さんが大變な嫉妬屋であるとか、下女のおきよどんが炊事場で轉んで怪我をしたとか、くだらぬ事まで一人でペチヤ〳〵としやべつて喜んで居る、不思議な男だなあと思つて吾輩は謹聽して居つた。而かし如何なる仙さんも、二時間もしやべり續けては疲れたと見へ、やがて紙入から五十錢銀君を取り出し『オイ之は君に…』と女中君に呉れた。女中君は屹斗十遍位は叩頭をするだろふと思つて居たら『へー大きに――』と云つたまゝ帶の間に入てしまつた、どこまでも不都合な女だなあと思つた。然るに理屈の分らぬのはやつぱり仙さんだ。寄席でも浪花節でも、聞くものゝ方から金を拂ふのが當前だ、今夜は仙さんが二時間もしやべり、女はそれを聞いて居つた方だから、云はゞ女の力から聞賃を拂ふべき理屈だ、それがアベコベに話を聞かせた仙さんの方から五十錢を拂ふた、仙さんは全くおかしな男だと思つた。仙さんはそれから勘定書を取り寄せ吾輩と外に八十錢を女中君に渡した、吾輩は其儘帳場に運ばれ、錢箱の中にグッスリ眠つてしまつたので、それから仙さんがどふなつたやら知らぬ。其翌日の晝過ぎ、吾輩は女將さんの手により數枚の銀貨と共に錢箱から出され、盆の上の勝定書と共に女中君が二階に持つて行く、吾輩は釣錢となつて客の手元に行くのだなあと知つた。客と云ふのは

三人の學生君であつた、而し今日は日曜祭日でもないのに、牛肉屋に飲に來て居るとは妙な奴等だ、多分學校の方は嘘を云つて缺席して居るやつ等であろふと思つた。三人とも正帽は持たない　けれども其話から想像すれば全く△△中學校の生徒だ、困つた奴等だなあ、之でも親は此奴等を偉い秀才でそして螢雪の勉強中だと思つて居るであろふ、氣の毒なものだなあと吾輩は同僚の五十錢銀貨に話たが、『オイA君が折角の御馳走だから在だけは飲んで行こふ』と一番年長が連りに德利を傾ける、A君と云ふのは此内で一番默つて居る男だ。A君は盆の上の吾輩等をヒッ掻んで財布の中に詰め込んでしまつた驚いたのは吾輩だ、苟も吾輩は大日本帝國の紙幣であるのに、折もせずたゝみもせず銀貨銅貨と同樣に、紙屑の如くヒッ掴んで財布に詰め込むとは、甚だ以て無禮な仕打だ。無禮は許してもやろふが、こんなにグチャ〳〵にして入れられては身体が痛くて弱つてしもふ。學生等は肉屋を出た。吾輩は窮屈でたまらぬ、一刻も早くA君から離れたいものだと金入の中で連りに念じて居つた。A君は下通町で二人のやつに別れてテク〳〵と歩き上通町長崎書林に這入つた。ハテ書籍でも買ふのであろふ感心だなあと吾輩は思つた。A君は店の内をグル〳〵と廻つて、そして種々の書物に觸つて居つたが、『オイ之を一册』と云つて財布を開き、嬉しや吾輩を引出して店員に渡した。何を買つたのだ

ろふと一寸のぞいたら青柳有美著『女の裏おもて』と云ふのであつた。中學校には此頃妙な教科書が流行るものだなあと吾輩は思つた。

(五)

吾輩は一昨晩はチボ君と共に汽車中に寢ね、昨晩は脂くさい牛肉屋の錢箱に泊り、今日は亂暴な書生にヒドイ目に會はされて散々疲れ切つて居る、今夜こそ此書林の金庫の中に久々振に腰を伸べよふと思つて居たら、其夕、釣錢と爲て吾輩はタゴール君の手に渡された。思ふが儘に亂れた長き髪、房のよふに垂れた顯鬚、しまつた口元、隆とした鼻、そして濕みあるやさしき眼元、何とも云へぬけだかき顔だ。それに浴衣の上に小さな兵古帶を無造作に卷きつけ、少しそり身になつて立つて居られる樣子は如何にも聖人の趣がある。吾輩は未だ拜顔の光榮には浴せぬが、印度の詩聖タゴール君が大方こんな風貌の人であらふと思ふた。タゴール君は袂を探して一枚の古狀袋を見出し、そして吾輩等釣錢を其中に入れて懷中に收められた。タゴール君は財布を持たれぬと見へる。タゴール君は其儘直に坪井の自宅に歸られた、そして吾輩等の這入つて居る古狀袋をグワチャリと机の上に投げ出した儘、

今買つて來た書物を讀み始めた、洋書であるから何と云ふ本だか無學な吾輩には分からぬ。吾輩は狀袋の中から室内の模様をのぞいた、床には南畵の掛物が一幅、そして其下に幾十冊の書籍や雜誌が亂雜に重り合つて居るばかり。辯護士か、いや違ふ、さりとて學校の先生でもないらしい、吾輩はやつぱり神聖なるタゴール君と云つておこう。タゴール君の宅には其夜來客があつた。額の禿た、そして衰世凱的スタイルの鼻鬚を生やし、眼先の鋭ひ五十四五歳の策士らしい男で、現内閣がどうたの、大隈侯は確に偉人だのと盛んにしやべる男だ、或は帳場の仙さん以上であろふと吾輩は感心して居つた。大隈侯が日本の偉人で、天下無類の大きな風呂敷を持つて居られると云ふ事だけは豫て聞いて居るが、幅が何丈何尺の大風呂敷であるやら、吾輩は未だ見た事がない、そんな珍らしい風呂敷であつたら此間の臺灣紀念共進會に參考品として出品したらよかつたろふに此男馬鹿に風呂敷崇拜と見ゐる。大隈侯を崇拜してしもふて、次には尾崎君は確に英傑だとやり出した。吾輩は尾崎君には去年の夏名古屋で一度出會つた事がある、六十歳ばかりの正直な男で、職業は下駄の齒替だ、此男、どうして齒替屋の尾崎君を知つて居るだろふと、不思議に思つて聞て居つたら矢つ張り違ふて居つた。此男の云ふ尾崎君は司法大臣尾崎行雄君閣下であつたのだ。あの尾崎君ならたしかに英傑だ

と吾輩も實際感心して居る、日本の司法史上に特筆大書すべきあの高松裁判に大浦君だけを不起訴にして、他の有象無象を夫々處罰した處など、尾崎君のよふな英傑でなくては迚も出來ぬ、此男の尾崎英傑論には吾輩も亦贊成の意を表しておく。我タゴール君は此男のしやべるのを默つて聞いて居る、『左樣』『ハァー』と時々簡單に答へるばかりで、感心して聞て居るのか不感心して居るのか吾輩にはどふしても鑑定がつかぬ。此男、今晩は大隈侯と尾崎君だけにして歸つてくるればよいがと思つて居たら、今度は又『而し其點に於ては安達君は確に偉いですねゑ』とやり出した。安達君と云ふのはどんな人間だろふと、吾輩は謹聽して居つたら始めて思い出した、去年の選擧でちよいと熊本で落選し、折角當選した自分の乾分に辭退をさせて、そして見事に當選したあの安達君の事であつた、落選と當選とを一時にやるのは安達君でなくては出來ぬ藝當、成る程此點に於ては確に偉いなあと吾輩も亦感心した。此男、それから二十分間ばかり口角泡を飛ばして連りに安達君を崇拜して居つた、此時まで不得要領の態度で聞いて居つたタゴール君は、突然自分の膝頭を二三度叩き、そして『モオお歸りになつては如何ですか』と初めて言葉を出した、タゴール君は無愛想な男だなあと此時吾輩は思つた。『左樣ですなあ、それでは何れ其内又お伺しましよふ』と云つて崇拜君は大急ぎ歸つた。不思議

な男だなあ、殊によると大隈侯の甥で、尾崎君の爲に從弟に當り、安達君の爲には義理ある弟にでも當る男でゞもあろふかと、其後姿を眺めつゝ、吾輩は思つた、崇拜君が去つたので、タゴール君は大急ぎ布團を引き出し寢床に這入り込んだ。吾輩も亦机の上の古狀袋の中にグッスリ眠に就いた。

（六）

吾輩は四五日來の疲れで、よふ〳〵九時頃眼が覺める、見るとタゴール君はもふ朝飯を仕舞ふて讀書の最中だ、外は五月雨がシト〳〵と降つて頗る陰氣だ、こんな日には奇麗な雛妓の手にでも渡り、一日を無邪氣に暮したら、どんなに氣が伸び〳〵するだろふなど、やつぱり吾輩等圓札でもこんな事を考へるよ。晝頃になつて突然來客がある、今度のは四十五六歳の脊の小さい男で、眼元がけわしく口幅の廣い、そして五分刈頭の左側に在る、直徑二寸位の大きな禿が著しく目立つ、汚れた小倉の詰襟の白服着用。やがてポケットから「朝日」を一本取り出しスパ〳〵と吸ふて、『然るに今日は愈々期限です、今日はぜひ戴いて歸るつもりで參つたのです』と妙に顯を突出した。讀めたり、此奴が高利貸と云ふ極道だなあ、こは容易ならぬ奴が舞ひ込んだと吾輩は吃驚した。而しタゴール君は案外平

氣な顏付き、腕を組んだ儘天井の節穴を眺めながら、『左樣』と一言返事をした。高利貸は猛烈なる手詰の談判を始め『イヤ今日は如何なる事が在つても御計算くださらねば歸るわけには行かぬです』と厭な顏を一層險惡にして、今にも飛びかゝらんばかりの勢である。而しタゴール君は相手が何と云つても『左樣』『ハァ』と受け答をするのみで、左程痛傷も感ぜぬらしい、偉いなあと吾輩は感心した。高利貸がしやべり終るのを待つてタゴール君は机の上の狀袋＝中には即ち吾輩等が這入つて居るのだ＝を取り出し、『僕は今、之だけ持つて居る、君、之を持つて歸り玉へ』と吾輩等を高利貸の前に投げ出し、そして讀さしの書物の上に眼を轉じて、小さい聲で讀始めた、高利貸は狀袋を振ひ出し、『二圓三十錢…仕方がないですなあ、而し兎も角之だけでも貰つて置きましよふ、では明日は屹斗取揃へ置きください……、それぢや明日は正午十二時に參りますから、』と大きな財布の中に吾輩等を入れて懷中に藏めてしまつた。神聖なるタゴール君をいぢめる不埒な高利貸奴、已れ其分では……、とは思つたが今更何共仕樣がない。吾輩は昨晩此家に來て、尊敬するタゴール君が甚だ貧乏であること、小さい時から育てた乳母らしい、七十歳に近い老媼君と二人住いであることを知つたゞけで、タゴール君の職業が何であるのか、家族はどふして居らぬのか、左樣な事は遂に知るべき機會が

なかつた。タツタ一夜の宿ではあつたが、今高利貸の手に移つて此家を去る事は實に〳〵名殘り惜しい思がした。

（七）

タゴール君の宅を出た高利貸君はテク〳〵歩いて坪井廣丁に出でそれから、通町筋を經て新市街記念碑通に出たよふだ。此處で一人の男に出會つた、吾輩は財布の中に這入つて居るので、今出會つたのがどんな男であるか見る事は出來ぬ、挨拶の模樣を聞いて居ると二人は至つて親しい仲らしい。『久振にやろふ』『よかろふ』で活動寫眞館前の小さな飲食店に這入つた。ゐらい奮發だなあと吾輩は思つた。女中君が來る、料理が出る、飲む食ふしやべると云ふ點に於ては高利貸だとて別に變つた事もない、そろ〳〵醉が廻つて來たらしい、我高利貸君の氣焰が甚だ痛快だ、『僕も役所を退てから直ぐ此商賣に打立つたが、彼ゝ七年ばかりになるだろふね、八十圓の貯金を資本にして始めたが、今では二千圓にもなつたよ、隨分愉快なものだ。ナーニ人がアイスだの鬼だのと云ふが、云ふ奴等は皆人間の屑、大馬鹿野郎共だ、君考へて見玉へ、高利を貸すが何で惡い、頭を下げて借りに來るから貸し

てやるのだ、高利が厭だと思ふなら、ヘン最初から借らぬがいゝさ、利の高い事は承知の前で借て置きながら、後になつて何の彼のとグズ〳〵ぬかすのはどちらが面皮が厚い、ねゑ、そうだろふ君、然るに…』『イヤ待玉へ、僕には大に意見がある、』『君の意見は後で聞ふ、熟ら思ふにだ…』滔々千言氣焰萬丈、當る可からざるアイス正道論を聞いて居る吾輩は成程感心だなあと思つた。斷つておくが吾輩は連りに感心する癖がある、いゝ癖か、惡い癖か、自分ながら分からぬ、二人は一時間ばかりも飲んだらしい、今日の勘定は僕が奮發るよと高利貸君は二圓何十錢かの勘定書の上に吾輩等を載せた吾輩は高利貸君と別れることの意外に早かつたのを喜んだそして、肉付のいゝ、色の白い、眼のパッチリした、二十歳ばかりの圓顔の女中君の掌に乘つて帳場に連れ行かれ、お女將さんの手に移つてパラリと錢箱に入れられた。吾輩は錢箱の中にてシト〳〵と降る雨の音を聞き、其儘スヤ〳〵と午睡の夢を貪つた、突然『ハイ八百屋さん』と云ふ聲を聞き、喫驚して眼を覺ました、此時既に吾輩は八百屋君の掌に乘つて居つた。八百屋君は年齡二十七八の小意氣な男だ。吾輩を財布に入れて幾何かの釣錢を渡し、例の屋臺車を挽きながら歩るき出した。ハヽア大分寢たワイ、もう日暮れだなあと吾輩は思つた。八百屋君は途々大分商ひをしたが、財布には多くの銀貨や銅貨が出入りをするだけで、吾輩

は依然として其中にかしこまつて居つた。屋臺車が止つて、吾輩は財布から出された。見れば立派な門構へ、吾輩は釣錢として此處のお主婦君の手に渡され、玄關脇より這入つて帳場の奇麗な錢箱の中に入れられた、中には五圓十圓などの吾輩の先輩等が澤山這入つて居つた。吾輩は隣りの五圓君に聞いたら、此處は一流旅館の△屋で、今の奇麗な奥さんが此處のお主婦君であるのだと敎へて呉れたお主婦君は年頃三十二三、殊によつたら四五になるかも知れぬ、みず〳〵しい丸髷と、金緣眼鏡との對照が何とも云へぬ程品がよくそして、笑ふ毎に小さな金の義歯が、愛嬌と共にこぼれ出はしないかと甚だ氣遣はれる。吾輩は先刻、掌の上に載ると共に衷心より敬意を表した。

〈八〉

其夜九時頃、『お客樣が之をくづしてくださいつて…』と云つて來た女中君の掌に乘つて、幾つもの梯子段を登つて奇麗な三階の座敷に連れ行かれ、そしてお客さんに渡された。お客さんといふのは四十五六歲の、色の黑い、鬚のこゆい、而しどことなく品のいゝやさしそふな好紳士、吾輩等を机の上に載せたまゝ女中君を相手に連りにビールを傾ける、吾輩は机の上にウンと寢伸びをした。室外を眺

めると、川向ふの家々の電燈が洗馬川の流れに映じ、遙に花岡山が、雨後の弦月に朧ろに畫き出されて居る樣が何とも言へぬいゝ景色だ、窮屈も錢箱や財布の中にのみ這入つて居つた吾輩の眼には一としほ面白く見へる。あの陰氣な家に蟄居して御座るタゴール君をいつか一度連れて來たいなあと思つた。座敷は話が次第に賑合ふ。二重瞳の面長のおゆき君といふのが此家の女中の元老らしい、年は二十八九、まだ三十にはなるまい、六歩五厘の東京辨に三歩五厘の肥後言葉を交へて話す處にはなかなかの愛嬌がある。顏は圓い、眼元の凉しいおとめ君とやらは能くしやべり能く笑ふ女だ。ビールが二三本倒れたと思ふ頃、可愛らしい聲で『今晩？——』と這入つて來たのは熊劵の舞妓君らしい。吾輩は舞妓が好きだ、あの房々とした黑ひ髮、大きな花釵鈿、奇麗な赤襟、そして朱を含んだよふな小さな唇から『今晩は——』と可愛らしい聲を聞く時には、何とも云へぬうれしさを感ずる、此舞妓君何と云ふ名であろふ。鼻鬚君も又能く話す男だ、『僕は藝者は大嫌いだ、デレリとして厭に氣取つて座敷一ぱい大きな臀を振り廻して、そして旦那とかいふのを捕へて無暗に鼻毛を引き伸す。俺は藝者を見ると、横腹に頭痛が仕出し、膝頭に疝氣が起るよ、困つた病氣だねゑ……豆。どうだ豆、おまゑも旦那の三人位は持てるだろう、俺の鼻毛まで引き伸したらそれこそきかぬぞ』と云ふと皆がドット

笑ふ。吾輩はハヽァ此奴身体が豆のよふに小さいから其名が豆と云ふのかなあと思つた。鬚君曰く『矢つ張り藝者は東京で、舞妓は京都…、女郎は大阪だろふ…？』と云ふ、側にビールの栓を拔いて居つたおとめ君が『それでは熊本は何でしよふ…』と云つたら鬚君、ちよいと首を捻り『熊本か、熊本名産朝鮮飴と宿屋の女中に淫賣婦……オット待つた、之はお雪さんとおとめさんに失敬、それでは女中は取消で、專賣局の女工位にしておこふかなあァハヽヽ……』と獨りでのんきに笑ふと、一座が又ドッと笑ふ。何が何やら吾輩にはサッパリ分からぬ。鬚君は其夜十一時頃まで豆君を相手に無邪氣に遊んだ。吾輩の同僚幾何かは、御祝儀となつて舞妓君の懷に抱かれて行つた。吾輩は涼しい風に吹かれて心地よく、今夜も亦机の上に一夜を明かした。此頃は不思議に机の上に寢る事だなあと吾輩は思つた。

翌日、吾輩は鬚君の懷中にかしこまつた。宿を出た鬚君の車は、唐人町の□□小間物店に着いた。吾輩は卷煙草入の代金となつて店員君の手に渡り、亞米利加の庫見たよふな素的に奇麗な錢箱の中にピシンと這入つてしまつた、錢箱の中は靜でいゝが夏は暑いのに閉口だ。それから二時間立たぬ間に、吾輩は、薄い髮を櫛卷きにした、色の青白い、眼尻の少し釣つた、そして粗末な浴衣を着た三十四五歳ばかりの小柄の女の手に渡された、厭な顏だなあと思つた。小柄の女君は、粗末なレーベ樣の財布の中に吾輩を四つに折つてグル〳〵と詰め込んだ。ハテ吾輩は此女のお供をして、今から何處へ行くのだろふかと考へた。

〔九〕

小柄の女君は、テク〳〵と歩いて熊本驛に出で十時半の汽車に乘りて松橋驛に下りた。そして松橋町の宅に着いた時には、亭主君は勝手元の椽端に晝寢の最中、枕頭には燗瓶が四五本轉がつて居つた氷屋にしては大きいが、此頃の雨では困るだろふなあと財布の中よりチョイと同情して見た。小柄の女君は戸口を入ると、勝手元の火鉢の側に買元の包を投げ出し、財布を戸棚の上に載せて、そして足首高く亭主君の枕頭に行き『コオ、あんたくさい、今戻つたばな。朝から酒ばかり飲ふぢ……、起きなはり、そふ起きんかな』と一杯機嫌で心地よく寢て居るところを、無理に起したら大喝一聲『ヱヽやかましい、何んだべラぐしやべりやがつて……』と亭主の肝癪が爆發した。神鳴さんが太鼓を叩き破つたよふな亭主君の一聲に、吾輩は喫驚して、アワヤ財布ぐるみに棚の上から轉げ落ちよふとした

而し妻君は割合に平氣な顏、大變な家に舞ひ込んだものだなあと吾輩は思つた。亭主君はムツクと起きた、五分刈頭の鼻の低い、そして口の大きい四十歳位の赤ら顏の男だ。成る程此男馬鹿に口幅が廣いからあんな大きな聲が出るのだなあと吾輩は思つた。細君も默つて居れば事はそれで濟んだであろふが、體軀小なりと雖も、墺太利に對するセルビヤの意氣あり、此儘引込んでは山の神たるの威信に關すとでも思つたのか、『何がやかましかてな、ヘン飲ふぢ寢るが仕事……ゑゝ氣色なあ』と細君の宣戰布告によりて事件は愈々大きくなつた。『ナーに、まだグズ〳〵ぬかすか、近頃わりさんが打たれんけんだろふ』とノコ〳〵と立ちあがり、細君の左の頰をしたゝか打つた、細君も負けては居らず胸倉にしがみつく、此處暫くは猛烈なるベルダン戰爭が起つた。局外中立の吾輩は、此戰禍の中に卷込まれることを恐れ、棚の上から息を凝らして見物して居つた。而かし勝負は意外に早く十分間立たぬ間に、青ひ細君は髮もしどろにワン〳〵と泣き出し、赤ひ亭主君は意氣揚々と火鉢の端に凱旋した。此暑い最中に喧嘩せずとも、夕方涼しくなつてからゆつくりやつたらよさそうなもの、智惠の無い夫婦だなあと吾輩は思つた。こんな活劇をチョイ〳〵見せられてはたまらぬ、吾輩は一刻も早く此家を出るべく心に念じた。

(十)

其夕刻、吾輩は青い細君の瘠せたる手に握られて向ふ隣の米屋に行き、何升かの米と交換せられた。吾輩は其夜米屋の錢箱の中に眠つた。其翌日、數枚の同僚と共に錢箱よりつかみ出されたる吾輩は六十歳位の百性老爺君の拳に載せられた。老爺君、色は黑いが顏面の構造が如何にも柔和で、何處となしに人を引つけるやさしみがある。三四十年前には、隣分村の娘衆に騷がれた事もあるであらふなど、吾輩は拳に坐りながらつく〴〵思つた。米屋の亭主君は大きな煙管で一服スーッと煙を吐き出し『德さん、あんたの米はよかけん何時でん持ち來なはり、高ふ買うけん』と云ふ、此老爺君の名は德さんだなあと知つた。而かし今の一言は吾輩チーッとばかり氣に喰はぬ。タッタ今、德さんが卸した一俵の米を、亭主君は斤が輕いの、仕上が惡いのと散々ケチを附けて、五錢も十錢も値切つて買つた事は、吾輩確に錢箱の中よりにらんで居る。それに德さんが歸ろふとする今になつて、『あんたの米はよかけん高ふ買う』とは、ても扨も何處を押たらそんな音が出るだろふ。此頃妙なお世辭が流行り出したものだなあ、之が衰世凱流の外交お世辭とでも云ふのであろふと吾輩は思つた。

吾輩は徳さんの大きな巾着に這入つた。徳さんは鹽や鯖などを買つて馬の脊に積み、堅志田往還を東へ〳〵と歩き、晝過ぎに自分の村に歸り着いた。戸口の掛札を見ると、下益城郡豊野村大字何〇〇番地とある、田舍は田舍だがいゝ景色だなあと思つた。徳さんの宅は小さな藁屋根の農家で、屋根の上には大きな草が十本ばかり青々と繁つて居る。面白い趣向だなあ、あの草の代りに近頃流行のダリアでも植へたらいゝだろふなど考へた。徳さんの宅は家族が五人、壁の破れと汚れたる疊の色を見それから長持が一つに、古い箪笥が一桙しかない事を知つたる吾輩は、徳さんもやつぱり貧乏だなあと思つた。吾輩は西側の壁の前に淋しさうに鎭坐します佛壇の抽斗しの中に入れられた。此暑いのに風通しの意い抽斗住ひには全く閉口ですなあと連れの銀貨君が連りにこぼして居る。暑い位は堪へも出來るが、臭い油虫がチョロ〳〵と吾輩の寢て居る所を、遠慮なしに走り廻るのには實際往生した。

其翌日、久々振りに雨が霽れたやふだ、厩舍の牛が大きな聲でモーと呼るのが聞える、紡績の汽笛の音よりも遙に上品だと思ふた。朝、郵便配達君が來た、『居るかな、手紙の來たばな』と一通の手紙を出した、『手紙てな、何處から來たろかな、一寸見てくんなはり』と徳さんが賴む、郵便君の曰くに、それは當時熊本歩兵第十三聯隊に在營中の、徳さんの、二男源さんと云ふのから來たのであるそ

ふだ、『源が手紙てな、何事だりろ、あんた讀で見てくんなはり』と徳さんが賴む。徳さんもやつぱり明盲目の組合員だなあと思つた。郵便君は敷居に腰打かけて、件の手紙を讀み初めた。抽斗の中から聞いて居るので文句は確と分らぬが、何でも勤務勉勵の功により、斑長殿より精勤證を下されたと云ふこと、自分も滿期の時にはぜひ伍長になつて歸るつもりで、晝夜寢なしに勉强中であると云ふこと、そして二三日内より大矢野原行軍右之候に付き、携帶金として三圓だけ、ぜひなからねばならぬ事に相成候間、此狀着次第大至急御送金被下度候と讀んで居る。郵便君の朗讀を謹聽して居つた吾輩は未來の伍長源君の爲に遙に健康を祝した。而し斑長殿から精勤證書を附與されることは氣拔だ、多分此次には曹長殿から勳章が渡されるだろふ、軍隊も開けたものだなあと吾輩は思つた。そして又伍長に爲るのはいゝが、此暑いのに晝夜寢なしの勉强とは驚く。時に大矢野行軍に携帶金がぜひ三圓なからねばならぬとは不思議だ……イヤ待てよ、近頃砲兵工廠が同盟國の兵器製造に多忙を極めて、彈丸を作る暇がなく、彈丸品切の爲め、事によつたら大矢野原で鉄砲に銀貨を詰めて射擊をやるよふになつたかも知れぬなどいろ〳〵と研究した。郵便君は澁團扇をバタ〳〵やりつゝ出て行つた。

徳さんは困つた顏付で手紙を眺め、思案に暮れて居るよふであつた。そふだ、徳さんの家に三圓とい

ふ金はなか〳〵ゐらい、大矢野原で無暗に携帯金射撃をして貰つては、徳さんもほんとに困るだろふと吾輩はつく〴〵同情した。吾輩も料理屋、女郎屋などでは、幇間か湯屋の三助見たよふに圓助々々と呼捨てにされて、何等の權威も認められぬが、恁ふして徳さんの宅に來て見ると、確に大日本帝國紙幣たる絶大の權威と價値とを認められることがほんとに嬉れしい。吾輩も奇麗な座敷や香水の薫は好きだ、而しそんな處に居て圓助扱ひをされるよりも、破れたる疊、不潔なる佛壇の抽斗でもよろしい徳さんのよふな正直な主人により自分の權威と價値とを認めて貰い、丁重にされるのがどれだけ嬉しいか分からぬ。吾輩は當分此處に居つて徳さんの友と爲り、そして徳さんの淋しい折々を慰めてやりたいなあと思つた。徳さんは佛壇より吾輩等を取り出し、破れた疊の上に並べて數へた。『待てよ此内から三圓送れば殘りが三圓二十四錢……明日限り役場に收めねばならぬ上納に足らぬごつなる、困つたなあ、』賣る米は無し、貸して呉れる人は無しと如何にも困つたさふな顔付、吾輩は徳さんの顔を見るのが如何にも氣の毒でならぬ。

（十一）

思案に暮て居た徳さんは、思ひ切つたよふに此内から吾輩等三圓を懐中に入れてトボ〳〵と出かけた愈々郵便爲替に行くのであらふ、源さんの大矢野も困つたものだなあと思つた。徳さんは山崎郵便局の手前で一人の婦人を見付けた、徳さんは小走りに追付き、『お鶴やんだろ、あんた熊本行ぢやなかいろ』と頓狂な聲で呼びかけた。お鶴ちやんと呼ばれた女君はチョイと立止り、『徳さんかな、ハイ熊本行きばな、途方むにやあ暑い事なあ』と答へた。それが馬鹿に早口で、一寸聞いたら英語のよふでなか〳〵而白い。吾輩は奇拔な女だなあと思ひ、ソッと徳さんの懐中から眺めた……成程奇拔だ、顔が稍々偏平で、眉と眼とが殆ど接近して、口は比較的に小さく、そして其中央に位して居る鼻の頂上が崩壞して舊噴火口の形を爲して居る樣が如何にも奇拔だ。奇拔はいゝが、年に似合はぬ大一番の丸髷が、餘りに頭の頂上に陣取つて居るので、もの言ふたびにそれが落ち轉けそふで、吾輩は甚だ危險に感じた。『熊本行きならえゝ鹽梅、賴みがあるたい』と徳さんが話し出そふとすると、お鶴君はそんな事には構いなしで喋々としやべり出した、『まあ徳さん聞てくんなはり、娘ば嫁入さする事に爲つたけん、今日は買物に行き居るところたい』と云ふのをきつかけに、祝儀は來月酉の日の友引の二十日である事、どふして〳〵嫁入させるにはなか〳〵の物入り、仕度ばかりで七八〇圓位はか〻

るだろふと云ふ事、婿に爲る吉藏どんが評判の辛捧人で、兵隊では上等兵まで仕上げて歸つた偉ひ人物である事、吉藏どんの親爺の平太郎老爺さんが、又なか〳〵正直な男である事、田畑が二反歩も在り、小作も廣く、去年も米が二十俵ばかりも殘つたと云ふ事、借錢と云つては堅志田の△△屋に百圓位在るばかりで、内輪の暮しは結構である上、吉藏どんの妹は、隣の區長さんの内に奉公に行き、今年は給金も四十五圓ばかり貰ふのだとか、丁度レコードの損ぜた蓄音機のよふな音聲で、大道の眞中で、滔々懸河の雄辯を振ひはじめた。此調子でしやべらせたら、吉藏どんの家は間口何間に奥行何間下家が一間で其下に味噌桶が何本、裏の竹山には筍子が何十本生ゑ、吉藏どんの三毛猫が何匹子を生んだと云ふ事までもしやべり出すだろふ、お鶴君が自分の口で勝手にしやべるのは構はんが、此炎天に曝らされ、塵を浴びて謹聽させられる德さんこそ、ほんとに氣の毒だなあと思つた。而し此の如き雄辯家のお鶴君を、此儘田舍に朽させるのは惜しい、お鶴君に亭主が無く、そして石井外相の令夫人が若し萬一死なれでもしたら、先日タゴール君の宅に出會つた、あの大隈崇拜君のよふな男を媒酌として、外相の後妻に世話したなら、外相も今のやふなヘナチョコ外交もやるまいになど考へた。そして吾輩は又例の通りお鶴君の雄辯に連に感心した。お鶴君の大道演說は約半時間で濟んだ。德さんはよふ〳〵吾輩等を懷中より取出し『熊本に行くなら迷惑だろふばつてん、之ば息子の源藏に屆けて呉んかな、第三中隊て尋ぬれば分る、ゑゝ鹽梅だつた』と折入つて賴んだ、そして吾輩等は愈々お鶴君の汗臭ひ懷中に轉宿した。お鶴君は『そんならいろ〳〵話もあるばつてん、歸つてからゆつくり話そふばな』と、黄色い聲を德さんの顯に吐きかけ其儘ノソ〳〵と歩き出した。吾輩等は『歸つてからゆつくり話そふ』には驚いた、今の調子で此上ゆつくり話されては、如何なる德さんも話の中毒にかゝるであろふ、心配な事が出來たなあと吾輩はしみ〴〵德さんの事を考へた。お鶴吾はサツサと歩いて松橋町に來た。一昨日の氷屋君の宅をそつと懷中からのぞいたら、今日はベルダン戰爭も中止で靑ひ細君は裏の方で熱心に亭主の浴衣の洗濯中であつた。お鶴君は一時の汽車に乘り込んだ。

(十二)

お鶴君は宇土驛を過ぐる頃、包の中から大きな握飯を取り出してムシヤ〳〵と食ひ始めた、向ふ側に陣取て居る二人の學生が『之は驚いた』と云ひそふな、けつたいな顏付でジロ〳〵と連りに見て居るお鶴君の飯食ふ顏はそんなに見物の價値があるだろふかと、吾輩もソツとのぞいて見たが、格別變つ

た處も發見せぬ、それよりも吃驚して居る學生の顔の方がよつほど見物の價値があるなあと思つた。汽車は熊本驛に着いた。お鶴君は澤山の乘客の中を喧嘩腰で押し分け、先登第一に客車より飛び降りた。熊本驛を出たお鶴君は、高尻からげて天竺木綿の白湯具もあらわに、大手を振つてノッコ〳〵と歩き出した。町々の車夫君も、お鶴君の勢には僻易したのであらふ、遙に敬遠主義を取り『乘りなはらんか』の一句も浴せぬのは如何にも心地がいゝ。洗馬町に出たお鶴君は、不斗右側の饅頭屋に寄り十錢がたの饅頭を買ふた、そしてそこのお主婦さんが『ゑらい暑さで御座りますなあ』と一寸御愛嬌を振蒔いたのが鏃蛇で、お鶴君はそろ〳〵娘の嫁入一件の話をしやべり出した。婿どんの人物、嫁入先の有福、田畑が二反歩、曰く何、曰く何と先刻德さんにしやべつた通り、又々軒下演說を始めたのには吾輩も驚いてしまつた、而し饅頭十錢の商ひをして、娘の嫁入話を謹聽させられる此處のお主婦君の驚き方と來ては吾輩以上であつた。お鶴君もこふして出會ふ人毎に一々饒舌つて聞かせるのもなか〳〵面倒であろふ、折角の事に『娘の嫁入に付て』とでも題して記念碑前の盛り場で、一夕公開演說でもやらかしたらいゝだろふになあと吾輩は考へた。お鶴君はよふしやべる女だ、財政困難の日本のことだから、遠からず饒舌稅なども出來るであらふ、そふしたら我がお鶴君などは尾崎法相閣下

や島田三郎君等と並んで、いの一番に最高稅額を課せらるゝ力であらふ、兎に角偉い女だなあと吾輩は感心した。お鶴君は『借錢といつても堅志田の△△屋に百圓位在るばかり』と云ふ處までのべつにしやべつて、呆て居るお主婦君に一瞥を與へて其儘ノコ〳〵と立去つた。お鶴君は三時過ぎに第十三聯隊に着き、そして營門の歩哨君に一禮して衞兵所に行つた。衞兵司令の軍曹殿は顯鬚が乃木式に生へて、左の頰に一寸した疵のある威嚴めしい人であつた。お鶴君は第三中隊の源さんに面會の旨申込んだ、一人の衞兵は軍曹君の命を受けて源さんを呼びに行つたらしい。其後にお鶴君は軍曹君を捕へてそろ〳〵しやべり出した、源さんがゑらいお世話になりますと云ふ挨拶を口切りに例の通り雄辯滔々、そろ〳〵娘の嫁入談に移ろふとする。今迄五月蠅そふにして居た軍曹君は『あなた、此處でそんな事をいつ迄もしやべるぢやない』面會所へ行つて待つて居なさい』と頭から一喝したので、流石のお鶴君も散々に恐れ入つて退却してしまつた。やがて德さんの息子の、陸軍歩兵一等卒たる源藏君が來た。吾輩は此人が今から半年の後に一躍して伍長に昇進するべく晝夜勉勵中の源さんだなあと知つた。お鶴君と源さんとの間には種々の話が交換された、それは無論お鶴君の娘の嫁入話が其内での最も重なるものであつたと云ふ事は、吾輩が云わんでも分つて居る。そして吾輩はお鶴君と最後の袂別

を爲し、源さんの上衣のポケットに轉居した。

(十三)

ポケット生活は、汗臭ひお鶴君の懷中よりも、幾分涼しいよふではあるが、片パンの屑が一ぱいたまつて居つて、吾輩の身体にベタ〳〵くつ付くのには閉口だ。さて吾輩も、之から愈々軍隊生活に入るのだと思へば、何だか國家の干城に爲つたよふで嬉しくてならぬ。源さんは意氣揚々として室内に歸つた。成程、室内はなか〳〵奇麗に整頓して居る向ふの寢臺に、大きな欠呻をして居るのが、源さんに精勤證を呉れた斑長殿であろふ、午睡の夢から今覺めさせ玉ふたらしい、如何にもやさしそふな伍長君だ、源さんが這入つて來たのを見て、『オイ村田、面會人は誰だつたか、そして婦人と云ふ事だが……怪しいぞ貴様は、』とニッコリ笑つた、源さんは『ナーニそんな者ではありません、村の者でありますと、辯解すると、斑長君は『貴様甚だ怪しからんぞ、愈々村の者だつたか。それぢや許嫁の令夫人か、將來の妻君で現在の馴染か、隱さんでもいゝじやないか』と連りに冷かす。『いゝゑ、左様な者ではありません』と源さんはきまり悪るそふな顔付、今度はこちらの隅に、ズボンの破れをつ

くろつて居た上等兵君が『班長殿、村田には此頃杉馬場方面に未來の妻君が出來たそふです、狡猾い奴ですから油斷がなりませんよ、何れ功三等症と云ふ勳章を鼻の先にぶら下げるだろふァハ、……』と笑ひ『オイ村田、面會人は誰だつたか、正直に云つたらいゝじやないか』と今度は上等兵君が訊問役だ。源さんも正直に言つたらよさそふなもの、『年は四十五六で、鼻の頂上に噴火口在り、蓄音機の如き聲を發して、雄辯滔々大道演說をやる、其名がお鶴と云ふのであります、報告終り』と、それだけが言へないだろふか、焦れつたいなあと思つた。今度は班長君が『村田、貴様は大分金を遣ふそふだな、月に幾何位貰ふのか、馬鹿な金遣つちやいかんぞ、今月も亦内から貰いはせんか、貴様なか〳〵狡猾いから一番成績が悪いぞ』聞いて居た吾輩は、ハテこんな筈ではなかつたがなあ、畫夜寢なしに勉強中で、半年先には一足飛びに伍長になろふと云ふ我源さんに對し、成績が悪るいと云ふのは不思議だなあと思つた。其夕、中隊の裏庭で銃劍術の稽古があつた。源さんも防具を着けて稽古にかゝつた。源さんは掛聲はなか〳〵うまいが試合は下手だ、吾輩は源さんの裸着のポケットに這入つて居るので『胴――』と一聲ポクリと突かれる度毎に、身体がピリ〳〵痛んでズタ〳〵に裂けはしないかと思つたが、これも國家の爲だと思ひジッと辛棒して居つた。兵營の夜は靜な事だ、九時半の消

燈叭喇がトトト――と鳴り出した、如何にも優美な音樂だ。吾輩は何時迄も此處に住ひたいものだなあと思つた。其夜、吾輩は私物箱の中に眠つた。夜中に誰やら盛んにしやべるので不斗眼を覺ましたら我源さんが熱心に寢言を言つて居るのであつた、成程、源さんの晝夜寢なしの勉強といふのは此處の事だなあと思つた。

翌日は休暇で、源さんは隣中隊の吉田とか云ふ一等卒君と早朝より外出した、そして新市街の若い女が並んで居る□□氷店の暖廉をくゞつた。二人はビールを飲む、林檎を食ふ、しいちやん、きいちやんとか云ふ二人の別嬪を相手に盛んに誤發展だ。吾輩は考へた、待てよ、之が源さんの大矢野行軍と云ふのではあるまいかと。竹山を竹林、橋を橋渠と云ひ、それから氷屋に行くのを大矢野行軍と云ふ、兵語といふのはなか〳〵むづかしいものだなあと思つた。時に、豐野村の親爺の德さんは、今日限の役場の上納がもふ濟んだのか知らん、吾輩は源さんの大矢野行軍を見るにつけ、德さんの事が思はれてならぬ。〔大正五年七月三十日〕

中編

(二)

一圓紙幣が又罷出で、此前の續きをしやべる、豐野村の德さんが、一俵賣つた米代の内から、よふよふ送つて遣つた三圓の紙幣も、息子の源さんが氷屋の誤發展で、ビールや肴の代となつて吾輩は遂に□□氷屋の錢箱に這入つてしまつた、吾輩は此頃よくも氷屋に緣のあることだなあと思つた。氷屋の女將君、其名がお花さんと云ふ、といつたら諸君は定めし色の白い丸顏で、二重瞼の眼がクルリとした。愛嬌たつぷりの花も羞ろふ絕世の美人なりと想像せらるゝであろふ。然り我がお花君は美人はでもあろふが、本年既に六十二歲、慶應年間チョン髷連中に騷がれた美人で、髮が薄く、眼尻が釣つて居るのが少々險に見へる。顏の白粉は五十年間缺勤なしに塗つて居るのであろふ、殊に首筋の白粉と笑ふ時の白齒が著しく目立つ。折から這入つて來たお客が二人。『へイ入つしやい、御案內――靜ちやん、君ちやん……お客さんばい、へイどふぞ裏の方へ……』とお花婆君連りにお世辭を振り蒔

く、吾輩は小さな錢箱の隙間より靜に形勢を傍觀して居つた。靜ちやんといふのはちつぽけな眼の細い女、君ちやんといふのは鼻の低い脊の高ひ女、二人がチョコ〳〵として從て行く。二人は裏座敷の食卓に陣取り何か一品注文した。凉提灯の明で二人の御人相を觀ずると年は十九か二十歳位、呉服屋か雜貨店の店員らしい。髪を角刈にして居る出齒君は、袂から朝日を取出し、三遍ばかりスバ〳〵と吸ふて『今夜も隨分暑いなあ……時に君の處のレコ（一寸母指を出して）は隨分やかましやそふだな僕の處はレコは少々薄ノロだがコイッの方（今度は子指を出して）が怪しからんやかましやで閉口だよ』と話の口を切つた。元來が一を聞いて十を悟る天資英敏なる吾輩も、レコだのコイッだのと云ふ店員君の指問答には驚いてしまつた。昔禪宗の混弱屋問答と云ふのを聞いて居るが、殊によつたら此二人は禪宗の問答をやつて居るのではないか知らん、妙な處で、不思議な善智識に出會つたものだなあと、吾輩は例の通り連りに感心してしまつた。

（三）

今度は大黒さんが嘘をしたよふな顏付して居る一力の店員君が、又ちよいと母指を出して『ン、俺の

處のレコには往生するよ、朝から晩まで口小言の絶へなしで店の者を頭からガミ〳〵と叱り飛ばす、昨日も今日も俺は散々やられたよ……今日俺が店に座つて居つたろふ、處が十八九歳の須らくの美人が來てそして浴衣地を見せろと云ふんだ、色が白ふて、眼がやさしゆうて、口元が愛らしゆうて、兎に角古今稀なる美人だつた、ところが二圓八十錢の品を取つて値段を負けろと云ふので、初の間はへーどふいたしましてお値段の方は……など能い具合に言つて居つたが、其愛らしい口元で値切らるゝのでたまつたものにあらず、よろしゆう御座ります二圓六十錢までお引申てあげましよふと云ふと先生益々値切る、とふ〳〵二圓三十錢まで退却したが美人の値切り方は益々强硬だ、幸ひ吉田や川崎は俺の處から少し離れて客に應待して居るし、隣に誰も居ないからと思つて極々祕密で大勉强ウンと思ひ切つて二圓に負けて賣つて仕舞つた。ところが君、運の悪い事にやあ例の禿番頭奴が後から見て居つたと云ふ始末だろふ、美人が去つた後に、禿奴が俺を帳場に呼び寄せて散々な口小言、そふして居る内にレコ（母指）が歸つて來て話を聞いて腹立まい事か、元値よりも引いて賣る阿呆が何處の國に居るか、貴樣のよふな奴は今日限り解雇だと云ふ眼の玉から火の出るよふな權幕で時局は愈々大發展したろふ、此先き雲行はどふなるだろふ困つたものだなあと恐縮して居つた處に、禿奴が俺に代つて

斷つて呉たから漸く解決した次第さ。而し禿も禿だ、始めから見て見ぬ振をして居つたら、仕舞に俺に代つてレコ（母指）に詫を言ふにも及ばなかつたのに、考への無い奴だ、ネエ君、同じお客にしても、美人に對しては幾分か商ひ振も違をふじやないか、そこが人情だからねゑ』と妙な處に人情論をかつぎ出して大黒君大に氣焔を揚げる。今度は出齒君が『アハヽ……そりやあ傑作、全く味噌を附けたなあ、俺の力はレコ（母指）は少々薄ノロで、あんな奴なら帳場に何十人頑張つて居つても閉口する事はないが、（子指を出して）コイツだ、コイツのやかましいのには往生だ。俺の顏さゑ見ると店頭で眠つて居る馬鹿が居るかな、顏どん洗つて來なはり、そら店先を掃け土間の掃除が惡い、陳列棚の硝子が汚れとる、それも拭へ此處も掃けと朝から晩までチンチロ舞ひ、如何なる俺もたまつたもんぢやない、イヤ往生するよ』と如何にも往生しそふな顏付、二人は愈々家の內の棚卸を始めて滔々千言氣焔萬々丈、お靜君とおきみ君は妙な顏して默つて聞いて居る。二人は長い間しやべつて勘定一金二十六錢を仕拂ひ、其儘ブイと出てしまつた。後見送つて居たお花婆君『ヘン今のは何處の靑共だい二時間も居つて勘定二十六錢、人を馬鹿にして居やがる。お靜、跡を奇麗に片付けろ……』と柳眉を逆立てブズ〳〵云つて居る。吾輩は店員の事は靑と云ふのだなあと今日初て知つた。

（三）

お花婆君は、其儘吾輩と銀貨十數枚とを纏めて懷中に捻じ込み、〇〇町の□□質屋の暖簾をくゞり、そして黑繻子の帶を質受したので吾輩はお花君の懷中より質屋の錢箱に轉居して仕舞つた。此處の錢箱は隨分大きい、全部欅の八分板で構造堅固、中に這入つて居ると風通しが惡くて其上外の話一つさゑなか〳〵聞こゑぬ。人間共が牢屋と云ふのは大方こんな處であろふなど丶吾輩は思つた。其夜九時頃、吾輩等一同は錢箱の中より搔み出された、見れば赤ら顏の額の禿げた意地惡るそふな五十歲ばかりの男、吾輩はすぐ之が此家の御主人公だなあと知つた。禿頭君は番頭を相手に帳簿を擴げて金の引合を爲し、そして數ある圓札を一枚々々に皺を伸ばして脊中の破れには膏藥を貼つて呉れる、なかなか以て御鄭重な事だ。吾輩も此時左の肩の破れに一枚の膏藥を貼つて貰つた。そして拾圓や五圓紙幣は殘らず金庫に入れて呉れたが、吾輩等一圓紙幣や銀貨などは金庫に入るべき資格が無いものとして又元の錢箱の中に入れて仕舞つた同じ圓札である吾輩等一圓紙幣に對して、末輩の銀貨同樣錢箱入りの待遇を與へると云ふのは甚だ以て不都合な禿奴だと、吾輩は不平滿々奮慨に絕へなかつた。而し吾

輩熟ら惟るに、金錢もやつぱり軍隊のよふなものだ、百圓札が將官で、五圓札が尉官、五拾錢銀貨以下が軍馬下士卒と云ふ處、そして其將校と下士卒との間に狹まつて居る吾輩等一圓札は所謂准士官と云ふ特務曹長格である、して見れば紙幣は同じ紙幣でも、將校同樣に金庫に入れて呉れぬからとて、そんなに不平を鳴らす譯にも行かぬ、こんな事には吾輩斷念は早い、こふ悟つて見ると禿君の取扱に對する吾輩の不平は直に消ゑて仕舞つた。其夜十時、吾輩は再び禿君の手によりて錢箱より出された。見ればまだ年の若い、如何にも奇麗な可愛らしい丸髷君が羞しそふに立つて居る、こんな奇麗な可愛い妻君を質屋に通わせるとは罪の深い御亭主君だ、能くも罰が當らずに無事息災で居る事だなあと思つた。禿君の前に在るのは、丸髷君が質入れに持つて來た少々古びた瀧縞の銘仙の單衣と黑地に銀糸で高浪模樣を、派手にスッキリと現したるまだ新らしい錦唐織の丸帶。『それでは八圓だけおあけ申ますよ』と禿君は五圓札と吾輩等圓札三枚を丸髷君の前に並べた。丸髷君は如何にも困つたそふな顏付で『どふか先刻から御願申上ます通り、拾圓だけぜひお願ひ申す事は出來ませんでしよふか』と羞かしそふに幾度も〳〵嘆願したが、それはとふ〳〵無効であつた、禿君は『そりや私の處では辻もそんなに出せませんよ、それぢあ他の店へでも行つて見なさるがよかろふ』とは如何にも儉貧

突だ。如何に額がハイスベリーに禿げ上り、如何に金の入齒を三本入れて居るとは云へ、お客樣に對し甚だ以て無愛想な挨拶だ。之ではどちらがお客樣だか、サッパリ譯が分らぬなあと思つた。こんな處に長居は無用、吾輩は丸髷君の懷中に這入つて、青白き電燈の光を浴び、程近き鷹匠小路の小さな家に着いた。內には御主人は不在で、体量十六貫八百匁もあろふと思ふよふな、縱よりも横の方にスラリとした一人の下女君が、柱にもたれて白川夜舟の光景は如何にも奇拔に見受けた、こんな女が若し眠り轉げでもしたら、板敷がこわれてとても家主が默つては居まい、甚だ以て厄介だなあと吾輩は思つた、吾輩は其儘茶棚の抽斗の中に仕舞われた。さて吾輩、明日は何處へ遣られるだろふ、米屋か酒屋か、洋服屋かなどいろ〳〵想像しつゝ眠りに就いた。

(四)

吾輩は大きな聲に不斗眠を覺ました。『オイ馬鹿だねゑ貴樣は、酒を持つて來い酒を……、馬鹿と云ふのが氣に入らぬか、それでは嗅今夫人樣々か、オイ酒だ〳〵、早く持つて來い……グーブ』イヤ早や驚いてしまつた、時計は午前の三時頃でもあろふ、此家の主人公が大銘酊での御歸館、口も殆んど

捌けぬ位の有様。而し吾輩は、不幸にして茶棚の中に這入つて居るので、其御面相を拜するの光榮に浴する事の出來ぬのが甚だ殘念である。細君が連りになだめると、『何だ、もふお寢み遊ばせ？……イヤ俺は寢ぬ。之からが愈々三次會だそゲーブ……頃は元祿十四年、七重八重咲く九重の、幕府が勅使へ御到着……うまいだろふ、オイ〳〵令夫人、早く酒を持て來ないか』には吾輩益々驚いてしまつた幕府が勅使へ御到着もいゝが、こんな眞夜中にやたらに到着されては細君が定めし迷惑であろふ、困つた元祿十四年君だなあと思つた。細君はやつとの事に夫の元祿君を蚊帳の中に寢かした』夜中の騷ぎで吾輩も翌日は大朝寢、ポッカリ眼が覺めた時には御主人元祿君の話聲が聞ゑる。『お杉君、昨晩は非常に銘酊したよ。而し愉快だつた。時に此樹定書は貰つて置くがまあ二三日待つて吳れ玉へ、ねゑ君』今度はお杉君が『而し御都合も惡いでしよふが、昨晩の分だけはぜひ戴いて歸りませんと…』と云ふお杉君と云ふのは料理屋の仲居で、此處の主人に對して昨晩の銘酊料金請求談判の爲め、早朝から御出張になつたのだなあと知つた。『それでは兎に角、明日まで待つて吳れ玉へ、明日になつたら何とかするよ』と元祿君頻りに詫びるが、待つて待たぬの談判は容易に解決せぬよふだ。折から主人の元祿君は、何氣なしに茶棚の抽斗を明けた、中には吾輩等八圓の一行が昨晩質屋より來た儘、嚴然

と鎭座ましく〳〵て居つたので、元祿君の驚きは非常なものであつた。『在る〳〵、お杉君在るよ、拂つておこふ四圓三十五錢？そら之をあげるよ、殘りはおまゑの車賃だ』と五圓紙幣を一枚ピラりと投げ出した。此時まで隣の部屋に、如何にも心配して居たらしい細君が、あわてゝ飛び出し『モシ其お金は、あの……先日から何度も參りますあの□□洋服屋へ、今日はどふしても拂わねば濟みませんから……』と非常に困つたらしい顏付で『其お金だけは……』と連りに嘆願したが遂に無効『馬鹿、引込で居れ、能ぢやないか服屋の方は何とかなろふよ、お杉君、心配はいらぬ持つて行き玉へ』と元祿君なか〳〵の威勢だ。お杉君は鬼の首でもせしめたよふに、ニコ〳〵顏で四五遍押し戴き『どふぞお近い内に入らつしてください、奥樣ほんとに濟みませんでしたねゑ、左樣なら』プイと出て行てしまつた。此可愛らしい細君が、昨夜質屋の禿の前に幾度も〳〵頭を下げて、よふ〳〵出かした八圓の紙幣は『濟みませんでしたねゑ左樣なら』で五圓札一枚はプイとお杉君の懷中に這入つて出てしまつた。濟まぬと思ふなら何故其五圓札を持つて行くか、不都合なお杉奴だなあと、細君に代つて吾輩が瞋め付けてやつた。

（五）

お杉君が去つた後で、吾輩はつくぐ〜と主人君の御面相を拜した、五分刈頭で眉が濃く、眼が小さく鼻の馬鹿に大きいのが特徴で、薄い鼻鬚が殊更に眼立つ、要するに瓢輕な顏付だ。床の柱には軍服と軍帽軍刀が掛つて居る、肩章には星が二つ、襟章が見ゑぬから隊號の分からぬのが殘念だ。ハハァ此先生は陸軍中尉で、質屋の禿に扱はせたら五圓紙幣相當官で、早速金庫に入れられる處だなあと思つた。今日は日曜で、中尉君は大急ぎ飛白の浴衣を引掛け『オイ出て來るぞ』と一言を玄關に殘して何處へか出かけてしまつた、出掛けるのはいゝが、今夜も亦眞夜中になつて、幕府が勅使へ御到着に爲りはすまいか、と吾輩は細君の顏を見ると心配でならぬ、それから一時間も立たずに、三十歳位の赤色襟飾の白い脊廣君が來た、洋服も白いが顏の色は一層青白い、愈々營養不良で神經衰弱と見受ける今日のよふな暑い日に、うろついて歩かずとも、内に居つてチト滋養分でも食つて居たらよさそふなものと、吾輩は初對面の脊廣君の健康に一方ならぬ心配をした。脊廣君はちよいと丸髷君に叩頭をして右手で二三度頭を掻いた、叩頭をして頭を掻くのは面白い禮式だ。『然るに奥様、ヱヽ……例の代

金の力がヱヽ……ぜひ今日はヱヽ……』と連りにヱヽづくしで話し出した、其ヱヽと云ふのは多分軍服代金の事であろふと、英敏なる吾輩は直に察した。細君は『申譯が御座いませんけれども……明日まで……何とか御猶豫を……』とちぎれはぎれに詫をする。けれども脊廣君。神經衰弱の割合になかく〜強硬だ。『奥様、明日はどんな事があつても拂ふからと、ヱヽ…昨日のお話でありましたが、二ケ月も月賦が滯つてはヱヽ……其困るですなあ』とプッと膨れた。膨れたつて縮んだつて今更仕方はない、其御金なら先刻頼べたの赤いお杉君が持つて行つてしまつたのだ、遲かりし服屋君、『困るですなあ』もあつたもんぢやない、君の困るよりもこつちの細君がまだ困つて居るよと、吾輩は言つてやりたかつた。細君は茶棚から吾輩等一圓紙幣三枚を出して『兎に角、之だけ差上ておきますから……』と差出した、服屋君は膨れたまゝ吾輩等を懐中に捻じ込んで、挨拶もそこ〜に出て行つてしまつた。中尉殿には困つたもの、あの丸髷の細君こそほんとに可愛そふだなあと、吾君は服屋君の懐中で同僚と共に話した。

（六）

服屋君はノコ〳〵と歩いて下通町に出た、そして△△菓子店に這入つて菓子箱を一つ買つた、多分御得意先への暑中見舞であろふ、此代金七十五錢也で菓子屋の錢箱に轉居してしまつた。菓子屋の主人君は年齢三十五六、如何にも短氣らしい小柄な男、帳場に座りて連りに讀書をして居る。何を讀んでるだろふと一寸のぞいたら尾崎行雄君著『政戰三十年』之には吾輩も驚叱してしまつた、『地租五厘減を三厘減にし、二億萬圓の地價修正は一億四千萬圓に止め……』云々とどふらい事を讀んで居る菓子屋の帳場でこんな政論を聞こふなどゝは全く意外であつた。イヤ面白い、吾輩も大に眞面目に聞いてやろふと謹聽にかつた處に、『お菓子くだはり、一錢がた』と五つばかりの茶目坊が來た、二億萬圓の地價修正も、茶目坊の一錢でお流れとなつてしまつた。折から店頭に俥が着いた、そして飛び降りた麥稈帽の男は大急ぎ朝鮮飴二箱との御注文、地價修正君は最大急行で紙に包む、シデ紐かけるの大繁昌、吾輩は五圓札の釣錢と爲つて麥稈帽君の手に移る。麥稈帽君は再び俥に飛び乘り大急ぎ走る俥は熊本驛に着いた、そして熊本發午後一時十六分門司行最大急行列車の二等室の一隅を占領した。茲に於てか吾輩は麥稈帽君の御人相を觀察する、年齢は二十六七、髮は五分刈、色は黑いが眼が大きくて鼻筋通り、赤銅緣の近眼鏡が一層男振を引立る、誠に立派な男振だが身体の小さいのが瑕だ、旅

行鞄にK、Sの大きな花文字が眼に付く、吾輩は帽子の徽章によつて直に大學生なる事を知つた。左隣りには仲居らしい三十女と、十九か二十歳位の藝者らしいのが御腰を据へる、二人は賣子を呼んで林檎を買ふ、キャラメルを買ふ、牛乳も買へばおすしも買込む、一体全体こんなにいろ〳〵買つてどふするつもりだろふと吾輩は不思議に思つた。右隣りには二十七八歳のワイシャツ君が陣取つて中央公論を開き泡鳴の書いたその一日を讀んで居る、打見た處生命保險會社員だろふ、そして月給は三十二圓位の處だなあと吾輩は鑑定した。向ふ側には肉付のいゝ五十男が連りに林檎をむいて居る、此男は受負師らしい、そして國には子供が五人に孫の三人位は在るだろふなあと吾輩は思つた。汽車は動き出した。隣の保險屋君はグラ〳〵と眠り出す、向ふの受負師君は鞄から小さな算盤を出してパチリ〳〵とはじく、まさか昨夜の散財の計算をして居るのでもあるまい、左隣の藝者と仲居君は黃色い聲でベチャ〳〵としやべる、やかましくてならぬ。藝者君の名は何と云ふだろふ？其大きな口で笑ふ時には、顏一杯を一つの口が占領して仕舞ひ、眼と鼻とが遠慮深かそふに顏の隅に小さくなつてちゞこまつて居る、面白く製造したものだ。而し何とやらの茶入一つが五萬圓にも賣れる世の中、骨董品と云へば羽が生へて飛ぶ婆婆だから、こんな骨董顏の藝者は、却て物好きの座敷に賣れるだろふなあ

と吾輩は思つた。二人の女は無性にぱくつく。こんなちつぽけな身体によふもこんなにいろ〳〵と這入るものだ、此調子で行つたらお座敷の御馳走は箸も附けさせずに、一と皿も殘らぬよふに平げるたろふ、こんな藝者を呼んだお客こそ掛り合だなあと思つた。汽車はやたらに走る。大牟田を過ぎ久留米に着いた。而し大學君は下車しそふな模樣もない、一体何處へ行くつもりだろふと考へて居る處にゾロ〳〵と乘客が這入つて來た、そして其一番仕舞に這入つたのは、一週間前に吾輩を博多から熊本へ連れて來て呉たなづかしい掏摸君だ、『ヤー掏摸君？先日は…』と吾輩は嬉れしさの餘り危く聲をかけよふとしたが、營業妨害をしてはならぬと思ひ、態々差控へた。掏摸君は向ふの隅に陣取つて車中の大勢を窺ふて居る。今日は詰襟の白服に、イタリヤ麥一文字形の麥稈帽と云ふスッキリした服裝何處から見ても縣の何々技師とでも云ひそふな風采だ。吾輩の隣りの骨董藝者の手提の中には、キャラメルがまだ三つ程殘つて居ることを吾輩は知つて居る、彼等が食つて仕舞わぬ内に掏摸君も早く掏摸て食つたらよかろふになあなどいらぬ心配までした。汽車は鳥栖驛に着いた。大學君は此處で長崎行きに乘換へた。吾輩は久し振に會つた掏摸君や、折角見知りに爲つた藝者君等と別れる時には何となしに名殘惜しい思がした。汽車が鳥栖を立つてから間もなく吾輩は眠つてしまつた。

（七）

騷がしい人聲にボッカリ眼を覺した、見れば武雄の停車場だ、大學君の俥は溫泉場に近き○○屋旅館に着いた。三階は涼しくて如何にも結構、但し此處の女中君の早口には驚いた。たつた今着いたばかりで死ぬる生きるのと云ふ譯でもないから、そんなに急き込んで話さずともよさそふなものだなあと思つた。大學君はなか〳〵默つた男だ、女中のお照君がペチャ〳〵と喋舌るのを時々『ンー』『ハー』位で聞いて居る、こんなにしやべられてはンーハーより外には返事の仕樣もあるまい。お照君は京都あたりの產物らしい、ブッキラボーな肥後言葉との問答、聞いて居ると面白い。

『私厭どすな、どうおしやしたの、さつきから默つて。何をそないにしゆんどいやすの』

『用事のなかけん默つとるたい』

『あんたはん、何をそないに怒つていやすの』

『怒つちや居らんばつてん、ぬしがくさい、あんまり喋舌るもんだけん默つて聞いとる處たい』

『まあ阿呆らしい、けつたいな人やなあ』

我が大學君は阿呆らしいけつたいな人であるのだなあと吾輩は始て知つた。大學君はお茶代と書いた狀袋に吾輩等二枚を入れて『四五日世話に爲る積り…』とお照君に渡した。吾輩等はお照君の掌に乘つて帳場の女將さんの手元に送られ、直に錢箱の中に這入つてしまつた。吾輩は折角此處の温泉に來ながら、温泉藥師如來にも參詣せず、蓬萊町の夜景も見ず、直に錢箱生活を命ぜられるに至つたのは甚だ以て不滿に絶へぬ。明日はどふか面白い人の手に渡り、萩野尾公園までも遊びたいものだなど考へつゝ早くより眠りに就いた。

翌日、吾輩は大分早く眼が覺めた、そして今日は愈々武雄見物だと、皺苦茶の身体に威儀を正して、女將君の指揮を待つて居つた。錢箱の蓋は何度もく〳〵明いたけれども、吾輩が出されたのはよふく〳〵九時頃であつた。女將君は四十位のやさしそふな品のいゝ人だ。但し今起きたばかりの顏で、左の眼尻に仁丹半粒ほどの眼脂がくつ付て居るのが確に一割位の容色を減じて居る。女將君も隨分寢坊だなあと吾輩は思つた。吾輩と數枚の銀貨とは、勘定書や茶代の受取と共に茶盆に戴せられて、今度はお常君と云ふ女中君によつて二階に運ばれた。二階のお客は年齡六十位のビリケン頭の眼先の鋭い恐わそふな老人であつた。若し此老人の前で『厭どする』だの『阿呆らしい』だのと一言でも云つたら、

頭の上から百雷が一時に落下するかも知れぬ、一体ビリケン君は何する人であろふ、まさか朝鮮副總督と云ふ柄でもないよふだ。吾輩は紙入に入れられてビリケン君のポケットに這入つてしまつた。吾輩の豫期して居つた萩野尾公園見物も、ビリケン君の懷中に這入つては愈々駄目になつたらしい。さて今日は何處へ連れて行かれるだろふ、若やコレラ病全盛の長崎にでも連れ行かれる事にもなつたら大變だなあ、心配でならぬ。

（八）

『左樣なら』で送り出されたるビリケン君の俥は武雄の停車場に着いた。雨に包まれし蓬萊山の朝景色は、無風流なる吾輩にも何となく面白く見へた。ビリケン君は青切符を買ふた。それが又熊本行で吾輩は今日又熊本へ逆戻りせねばならぬと云ふ事を知つた時には、今度の旅行の餘りに短かゝりしに何だかあつけない思がした。ビリケン君は車中の人と爲つて午前九時四十六分武雄驛を立つた。吾輩は紙入の中にスラ〳〵眠つてしまつた。『ア、お久し振りですね、今日は何處から……』『俺は武雄から……あなたは何處へ？』『私は一寸した事件で久留米まで……今が歸りです』『相變らず御多忙

でしよふ……結構ですね』と云ふ聲にぴつくり眼を覺ました。相手の人はどんな男であるか吾輩は紙入の中に這入つて居るので見る事は出來ぬが、いつか熊本で一度出會つた事のある辯護士H君の聲のよふだ。さるにても我ビリケン君が『御多忙でしよふ、結構ですね』なんて、人並にお世辭を言ふなどゝは全く思ひがけぬ事であつた。H君はビリケン君の隣りに席をしめて『時に鄭家屯事件は如何です、隨分支那人等もひどい事を遣つたものですねゑ』と話の糸口を切つた。『イヤ折角の事にま少し遣つて呉れたら愉快であつたが兎に角駄目ぢやなあ……折角面白い機會が出來ても、現内閣のお手際ぢや迚も甘い料理は出來ますまいよ』とビリケン君が答へる。するとH君は『イヤそんな事はないでしよふ、今度は政府もしつかり遣りますよ、元來現内閣の對支外交が拙劣だなどゝ云ふのは、それは反對黨の常套語です、確かに除々と成功しつゝあると云ふことは、昨日の閣議に於て外相の説明に徵しても認められるでしよふ』と云ふのを前提として喋々千言、大隈内閣の偉いことを褒め出した。相手が若もタゴール君であつたら客車の天井を眺めて『左様』『ハー』と謹聽もして呉れよふが、ビリケン君はなか〳〵感心しそふな顏もせぬ。イヤ感心どころか大きな聲でどゑらい氣焰を吐き出した、『イヤそりやあ、あなたの我田引水説だ、こんな事は局外から觀んと分からぬ……歴代の内閣それ

〳〵失政もあつたが現内閣位失政の多い内閣は無い。失政は失政でいゝが隈侯の遺りかたは殆んどヅウ〳〵しい、外交の大失態や兵器不當賣却問題などは論外としても、乃木問題や代議士買收問題、それから今度の内閣居据り問題など、こりやあ憲政史上に於ける大問題だ。ヅウ〳〵しい大浦が政治界より隱退したのは武士道的自殺などゝ賞揚して不起訴にするなどは何たる惚けた仕事だ、折破詰つて隱居をしてそれが日本の武士道なら、武士道も一山百文の大安賣ぢやないか君……乃木問題と來ては、こりやあ純潔なる日本國民の精神上にどんな影響を與へただろふ……、イヤ僕はこんな事は一々喋舌りたくはない……、要するに今の内閣なんか一日も早く葬つて仕舞わぬと、此先き又どんな由〻しき事件を仕出かすか分からぬ。元來が八十近くの御隱居を擔ぎ出して國政を任せるなど云ふのが間違つて居る』と左掌でビリケン頭の頂上を二三度撫で『一体日本人は老人でなくちやあ仕事は出來ぬよふに思つて居る、惡い癖だ、青年に元氣がない。ピットは二十三歳で大藏大臣に爲り二十四歳で首相になつて居る、那翁は三十二歳で埃及攻略の總指揮官と爲り三十六歳で帝位に就いた。千八百何年であつたろふかな、俺は首相の名は一寸忘れたが英國に自由黨内閣が出來た、其時のチャーチル君は三十五歳であつたと覺て居る。現海相バルフオアー君も三十八の時に地方大臣と爲つた。米國の

大都市紐育の現市長さんは今年が三十六歳の青年と云ふぢやないか。それに何だ、大隈侯は七十九歳の御老人、温室に這入つて花でもいぢつて居つたら味噌も糞もつけずに濟んだろふに、困つた老爺さんだ。北條時宗は三十四で死んだ、加藤清正は五十一で死んだ、草履取から天下を取つた豐太閤でさえ六十三で死んで居る、それを思ふと今時の政治屋どん達は餘り長命過ぎてスッカリ老耄をして仕舞つて居るのじや』と今度は右手で下顎をちよいと撫で、獨り言のよふに『元來政治と云ふものを、老人連が保養仕事のよふにやつて居る、甚だ怪しからんのだ…』ビリケン君の氣焰は萬々丈、H君は困つた顏付で『而し』『けれども』など時々横鎗を入れて見たが、到底當るべからずと見たのであろふ、遂に沈默してしまつた。吾輩は紙入の中より謹聽して居つた。ビリケン君の氣焰はまだ〳〵隨分と續いた、此調子で行つたら汽車が熊本を過ぐるのも知らずに、鹿兒島まで喋舌り續けはすまいかなど吾輩は心配に絶へなかつた。而し大牟田に着いた時、泥醉の鼻下長君が酌婦見たいな二人の女に擁せられてベチャ〳〵と轉り出したので、充分に聞き取る事が出來なかつた。H君は上熊本でビリケン君は熊本驛で降りた。

(九)

ビリケン君は『△屋旅館まで』と車夫に命じた、△屋旅館と云ふのは四五日前に吾輩が八百屋君の巾着より出て一泊の光榮に浴したる處だ。車夫君は年齡四十ばかり、年の割には馬鹿に足が遲くて、走る具合を見ると腰付が變だ、此男愈々陰睾田虫に襲はれて居るのであろふ、陰睾田虫はいゝけれども汽車の時間が切迫した時などは間に合はぬ恐れがある、警察も車夫の陰睾田虫取締りの必要があるなあなぞ考へて居る內に、俥は宿の玄關に着いた。ビリケン君が車賃を出す時に、吾輩は巾着の中からちよいと玄關をのぞいたが、今日も亦丸髷の主婦君が、ニコ〳〵笑つていそ〳〵と出迎へて呉れた。同じ丸髷でも豐野村のお鶴やんのよりも數等品がよく、そしてお鶴やんの丸髷のよふに、叩頭する度毎に落ち轉けそふな心配のないのが安神だ。ビリケン君は奇麗なる二階の座敷に案內せられてどつしりと腰を据へた、此時吾輩等の這入つて居る紙入と金側の時計は机の上にグワラリと載せられた程なく〇〇〇君と云ふ色の白い、顏の愛らしい、但し臀の馬鹿に大きい女中君がお茶を汲む、やがてお膳を運んで來てお給仕をする、ビリケン君は跌坐をかいて見る〳〵內に六杯の飯を平げ、そして又『オ

イま一つ呉れ』と茶碗を差出した。オイま一つ呉れもよいが、大概で止めて貰わぬと飯櫃が泣き出しはすまいかと吾輩は心配でならなかつた。而しよふ食ふ老人だ、一度に六杯とすれば一日に十八杯、一年には六千五百七十杯で食ひ盛りの二十歳の年から數へても、六十歳の今日まで二十六萬二千八百杯は食ふた勘定だ、ビリケン君は偉い、こんなに飯がいけるから、あんな大きな氣焔が出るのだなあと吾輩は感心した。ビリケン君は白飛白の帷子に薄茶色の兵兒帶を無造作に結び、大きなバナマ帽に葡萄のステツキを打振りノツコ〳〵と出て行く、幸に雨も止んだ。ビリケン君はブラリ〳〵と唐人町に出で、××時計店に這入つて正札七圓五拾錢の磁石を買つた、七圓五拾錢を奮發せねば西と東が分らぬとは、人間も不自由に出來たものだなあと吾輩は思つた。吾輩は時計屋の錢箱の中に轉居してしまつた。カチ〳〵と時計の音がやかましくてならぬ。さるにても今は何時頃であろふ、一つの時計が五時を打つかと思へば、一刀のは三時を打つ、暫くすると又一つのが九時を打つ、ァ、何時が何時やらさつぱり分からぬ、時計屋と云ふのは時間を知るには不自由な處だなあと思つた。其夜吾輩は時計屋の錢箱の中に一夜を明かした。

(十)

翌日八時頃吾輩は錢箱より出されて、三十八九の色は黑いが眼のパッチりとして口元のしまつた好男子君の巾着に這入つた。巾着の中には平假名で『よしだ』と刻つた認印が這入つて居つたので此男吉田君と云ふのだなあと吾輩は知つた、吾輩は時計修繕料の釣錢と爲つて今吉田君の手に渡つたのである。吉田君は無造作に吾輩をちよいと巾着に入れたまゝ、通りがゝりの俥を招んで熊本停車場に走つた。吉田君は一体何をする人であろふ、眼の具合は軍人らしく、鼻の鹽梅を見れば役人のよふに思われ、口元の具合はどふしても會社員だ。吉田君は松橋驛までの青切符を買つた。吾輩はお鶴やんと赤に乘つてから以來は、此頃何處に行くにも青切符ばかり、自慢ではないが、吾輩も近頃出世したものだなあと思つた。吉田君は車中の人と爲つた。やがて愛らしい給仕君が來て『あなた、何處まで……』と尋ねる『僕は松橋迄…』と吉田君はやさしく答へた。給仕君は今乘つた客を、順々に尋ねて歩いた、そして一番仕舞の力に大きな旅行鞄を二個程横へ、林檎を肴にポケットウキスキーを傾けて居つた四十四五の役人らしい髯君の前に行つて『あなた何處まで』をやつたら、髯君は五月蠅そふな

顔付をして『ンー俺か……俺は人吉』と如何にも險貪突に答へたが、吾輩の見る處髯君餘りお人よしでもないよふだ。元來『あなたは』と云つたら『俺か』と云はず共分つて居る、給仕君も何ぞ物好きに尋ねて歩くでもあるまい、近くであつたら眠つて下車驛を乘り越してはなるまい、遠方であつたら上靴でもあけよふと云ふ親切からの尋ねぢやないか、そふ險突を食はせずともよさそふなものだ。而し又考へて見ると『俺か』位は言はなければ、役人たるの威嚴に關するよふでもある、多分役人の威嚴を保持する爲めに俺かの一言を發したものであろふ、役人に爲るのも一擧一動なか〳〵むづかしいものだなあと吾輩は思つた。汽車は松橋驛に着いた。停車場を出た吉田君はガタ馬車に乘つた、囚人護送用の監獄馬車の方が數等奇麗のよふだ。此蒸暑い時分に窮屈そふな此箱の中に、定員五人も詰め込まれたら困つたものだと心配して居たら、幸に乘合客は外に二人ぎりであつた。馬車は長い松橋町を東へ〳〵と動いて行く。吾輩は洋服のポケットに這入つて居るので、二人の客の御面相を仔細に觀察するの光榮に浴する事が出來なかつた。而し『あんた何處まで行きなはる』とか『へー、砥用から濱町の方まで……大分暑ふおますなあ』と云ふ挨拶をきつかけに二人の話は馬車と共にそれからそれへと進んで行く。話の模樣から察するに、一人は八代邊の馬喰さんで、一人は何處ぞの賣藥行商人

らしい。初は双方商買上の話であつたが、話はいろ〳〵と變つて、次第に馬力が加わると今度は嬶の話に移る。

（十一）

『そふですなあ、一体嬶ァと云ふやつは、程能くすれば附け上るし、叱れば膨れる愚痴を言ふ、困つたもんですばい、こらあ叩くに限りますなあ……俺アもふグズ〳〵言ふ時や直に打叩きますがなあァハ、……』と何か大發明でもしたよふにゑらい勢で話し出した。すると賣藥屋君は如何にも驚いたそふな顔で『へー、おかみさんを叩きますて？…へー、あんた偉ふおますなあ』と云ふ、妻君を叩くのは、そんなに偉いものだかなあと吾輩は感心して聞いて居つた。『而し又、あんまり叩くと飛び出しますから厄介なもんでなあ……叩くのも加減もんですばい。…俺あ之が好きでなあ』と右手で一寸酒を飲む眞似をして『此春でがした、俺が矢部の力に牛買いに行きましてな、程能へ牛を買い出さず、歸りに濱町の料理屋にかやり込んで、二日の間にとふ〳〵二十五両ばかり遣つて仕舞いました。處があんた内に戻つてから嬶奴が其事を嗅ぎ知りまして、矢釜しゆう云ふの云はんのと云ふ騒ぎぢやない

餘り矢釜しゆう云ひますので、とふ〳〵例の通り打叩きました丶い。處があんた少々叩き加減が過ぎましてな、嬶奴、腹かいて里の方に戻つて仕舞ひましたろふ。……俺も始の間は厄介拂ひでもしたよふな氣がしまして、一日二日は却て呑氣でしたが……さて嬶と云ふ奴、居らぬとなれば乂不自由なもんでなあ……とふ〳〵人を賴んで、やつとの事に呼び戻しました丶い』と、馬喰君は袂から朝日を一本出してマッチを摺りつ丶『藥屋さん、嬶ちゆう奴は、丁度時計と同じよふなもんぢやなあ、時計があんた、持つて居る時やあ左程爲にもならんごたるばつてん、さて、ちよいと恁ふ質にでも曲げてひよつくり持たぬよふにでもなると、なか〳〵不自由を感じますでなあ、アハ丶――』と獨りで高笑をやると、今迄仁丹を嚙つて居つた我吉田君も、ツイ釣込まれてワハ丶――と笑ひ出し、馬車中は入賑合だ、馬喰君が妻君と時計を比較べた處は甚だ奇拔だ、道理で時々妻君が亭主の胸倉に飛び付きチン〳〵騷ぎをやるのぢやなあと吾輩は思つた。吾輩は巾着の中にかしこまつて、馬喰君の愉快なる講演に聞きとれて居つたので、馬車が今どんな處を走りつ丶あるか分らぬ。幸ひ吉田君は馬車を停て煙草を買つた、其時巾着の口が開いたので吾輩は一寸馬車の外をのぞいた。遙の山々が屏風を立てたよふに連り、青々たる稻田がそよ吹く風にザワ〳〵と波を立て丶居る。成る程い丶景色だ。景色は誠に

結構だがヒヨイと眼を轉ずると、通行繁き大道端の物干竿に、色の褪せたる女の赤湯具と、二ケ年位は主人の腰に忠勤を盡くしたよふな灰色の褌が二筋三筋ピラリ〳〵と飜つて居る。定めし日光消毒をやつて居るのであろふ、能く衛生思想の普及したる村だなあと思つた。而し折角の事に店の軒下に曝したら、日覆にもなつてい丶だろふに。人間と云ふものは案外智慧の無いものだなあと吾輩は思つた。

(十二)

「馬車はガタゴロと動き出した。馬喰君は話頭を我吉田君に轉じた『旦那さんは砥用行きで御座りますか……砥用の方には此頃、質素肥料會社の方で、水から電氣を起して、其電氣から肥料を造るとかで綠川に電氣工事が始まり、何樣ゑらい賑合いで御座んすけな……旦那も大方其方のお役人でしよふなあ』と云ふのをきつかけに『而し旦那、俺アどふしてん合點が行きませんなあ、雷さんもあんた電氣と云ふぢやありませんかな、電氣が肥料になるなら雷さんが落ちた處は稻でも粟でも一段と成長りそふなもんだが、其實黑燒けになつてしもふ、可笑しいぢやありませんかな。電氣で肥料が出來る

なら、糞を造る人間の腹の中は電氣ばかりの筈だ……イヤ之ばかりは合點がまいりませんなあ、一体どんな遣繰りに爲つて居ますかな、其肥料が出來るのは……』馬喰君の質問に吉田君は面食つてプッと吹き出して仕舞つた。『アハヽ……困りましたなあ其説明には……。夫は其、簡單に云ふと、此空氣の中には無盡の游離窒素が存在して居るのですがな、之に電氣を應用して石灰窒素を製造るのですそれを改造して硫酸安母尼亞と爲しドシ〳〵市場に供給すると云ふ具合に爲つて居りますがな』と吉田君の説明に今度は馬喰君が面食つて仕舞つた。無盡が窒素に存在するとか、安母尼亞を市場に改造するとか、珍紛漢紛唐人の寢言を聞くよふで、何が何やらサッパリ分からぬ。『へー』と云つて眼を白黒させて居るらしい。馬喰君は此先き質問をしたら又どんなむづかしい答をされるかも分からぬと思つたのであろふ、『ハハァ』と云つて其儘引込んでしまつた。それから馬喰君は自分の營業の牛馬の話を持ち出していろ〳〵の説明を始めたが、吾輩は何時の間にやら吉田君の懷中にスヤ〳〵と眠つて仕舞つた。馬車は堅志田町に着いた。此處で又砥用行きだと云ふ色の青ひ、眼の小さい、眠むそふな顏をした三十五六の一人の男が乘り込んだ。吉田君は大阪毎日を取出して讀む、藥屋君は居眠りを始める。馬喰君は二人の相手がそれ〴〵職務に從事したので、話の相手を失つて仕舞つた。幸ひ堅

志田より乘り込んだ男に、良き敵御座んなされと云はぬばかりにそろ〳〵問答を始める『あんた何處行きで御座んすか……へーあんたも原町行きかな……そして原町には何の用事で行きなはるかな……エヽ繭の買入に、左樣かな……あんた里鄕は何處かな……』馬喰君が五月蠅く尋ねると繭買君は叮嚀に答ゑる。之では丁度裁判官が身元訊問をするよふた。馬喰君も殊によつたら判檢事志願者の一人ではないか知らん、氣骨稜々奇拔極まる我馬喰君の如きに、道中眼鏡の一つも掛けさせて、高松裁判所あたりに据へたら、大浦兼武君などもあの儘では濟まなかつたかも知れぬなど思つた。

(十三)

馬喰君の話は例に依つて次第に馬力が加はる。そして繭の話に逆戻りして養蠶の話と爲る、時に繭屋さん、養蠶ちゆう商買は怪しからん仕事と俺あ思ふなあ……まあ考へち見なはり、卵から生れかして寒暖計を掛けて火を入れる、ヤレ濕れ桑を食はすると虫が痛む、ソラ時間が來たから桑を食せと、夜晝寢なしで可愛がつて育てる、そして一枚のハゼに二三匹の腐れ虫でも見付け出すと、それこそ泣き出しそふな顏付して大騒ぎをやらかす、ゑゝかな、之を見ると養蠶をする女子なんかゑらいやさしい

情け深いよふに見ゆるが、さてそれが四度眠つて、愈々上簇つて美くしい繭を造るだろふ……繭屋さん、之からじや俺の話は……、蠶が散々苦勞をして美くしい繭を造るのは、人間ならば十九か二十歳よふ〳〵一人前に爲つて男ならば嬶を持とふ、女子ならば良か亭主を見付け出して、早く嫁入して子供の顏でも見たいと云ふ時じや、ゐゝかな、それがあんた、繭の中に入つてよふ〳〵蛹に爲つたばかりで、之から蝶になつて夫婦を作つて卵を生まふと云ふ大事な時に、火を入れて炙り殺すちゆうは何ちゆう慘酷しい事がな。それがあんた、荒くれ男なら知らんばつてん、美くしい顏した女子のぶんが平氣で恁ふゆふ慘酷しい事ばするて思ふと、恐ろしいもんなあ……イヤ女子ちゆう奴どまあ恐ろしいもん。手近あ話が藝者娼妓が其通り、男を蠶のよふに扱ふて、あんたが、來て呉んと明日の日が明けんちゆう風に、大騷ぎをして呉れる、すると男はそろ〳〵田畑を食ふ、今度は四度眠りに家屋敷を食ふて、愈々一文無しに上簇するとボイと肱鐵砲を食はせて炙り殺して仕舞ふ……怪しからん事だ、繭屋さん、あんたの商賣も良か商賣ぢやにやあ。止めなはり、それよりも馬喰でも始めたがゐゝばな……』と馬喰君の氣焰はガタ馬車の天井を突き破らんばかりだ。初めて出會つた繭買君に商買替の忠告とは愈々振つて居る。繭買君は如何ばかり驚いたであろふ、局外の吾輩でさゐ之には愈々驚き入つ

て仕舞つた。馬喰君の話は繭の事から、今度は米が安いの高いのと云ふ話に移り、それからそれと千變萬化、吾輩は奈良丸の浪花節を聞くよりも、一層面白く聞て居つたが、いつの間にか其儘スヤ〳〵と眠つて仕舞つた。巾着が開いたので不斗眼を覺ました時には、吉田君は既に馬車から下りて賃金を拂つて居る處であつた。吾輩は今、砥用の原町に着いたのだなあと知つた。

【大正五年八月二十六日】

後編

（一）

吾輩は一圓紙幣である……と鐵から棒に、出しぬけに大きな聲で名乘りを揚げても、讀者諸君はフ、ンと言つて見向いても呉れぬだろふ。而し見向いて呉れよふが呉れまいが、大日本帝國の一圓紙幣たる吾輩に於ては何等の痛傷も感ぜぬ。吾輩は九州博多でチボ君の懷中に飛び込み、熊本に入り込んだのを始めとし、轉々して益城郡砥用の町に着した處までしやべつておいたが、それから丁度二ヶ年になるのだ。吾輩は田舍町の砥用の事など拔きにして、二ヶ年間を一足飛びに飛び越し、最近に於ける吾輩の活動振りを、少しばかりしやべる事にしよふ。

冒頭に吾輩は云つておく。尖頭の天下が轉倒りて白頭老爺が出て來よふが、加藤の眼鏡が壞れよふが何處までも價値の變らぬのは神聖なる吾輩一圓紙幣である、武内大臣は何處迄も威張つたんのだよ、……と云つたら、何だと、金貨本位の日本に日本銀行兌換銀劵で、此劵引かゑに銀貨一圓相渡可申

候では餘り威張られた柄でもあるまいとは、吾輩に對して甚だ以て無禮千萬だ。成程、五圓紙幣や十圓紙幣の上役等が金貨と引換へられるのに、吾輩の引換られるのは銀貨である。銀貨であるから卑しいと云ふのは一を知つて二を知らぬ沒曉漢の言分だ。考へて見給へ、成金拜金巾着切り、金のつくのに碌なものは無い、京、大阪の何々商店の廣告郵便の炙り出しに、一圓の反物一反注文してさゑ金の指輪が景品に送つて來ると云ふ婆婆だ。成金と云ふ言葉はあれど成銀と云ふ文句は聞かぬ。ヘン、何といつても一圓紙幣は威張つたものだ。イヤ話が横道にそれてしまつた、どれぼつ〳〵しやべるとしよふ。

吾輩は其後二年の間、京大阪は勿論の事、遠くは臺灣朝鮮あたりへも幾度か飛び廻り、そして大牟田方面をぶらついて居つた吾輩は、本月初めに又々馴染深い此熊本に舞ひ戻つた。大工の吉さん……と出しぬけに云つても諸君には分らぬが、吉さんは大牟田の大工で、吾輩は吉さんの懷中に這入つて今熊本に來たのである。吉藏か吉平か、又は吉五郎と云ふのか左樣な詳しい名前は知らぬが、兎に角横丁の吉さんと云つたら、喧嘩と火事が大好きで、そして大酒を飲んで馬鹿に小理屈を並べるので名高ひ。此頃のよふな時候に、人が若し『吉さん朝晩は大分暮しよくなつたなあ』とでも挨拶したら『朝

晩だけ米と酒とが安くでもなつたと云ふなら暮しよくもあろふが、之では一向暮しよくもないたい…ナニ時候が、時候ならもふ秋だから之位はある筈、朝晩冷へるからつて、そふ珍らしい事もなかろふ』とトットと行つて仕舞ふ。『今日は何處に行きなはる?』とでも聞いたら、『何處に行こふと此處に行こふと……行く先きは行つて見んと分からん』と劍もホロロの挨拶。一から十まで此調子なのでなか〳〵面白い。

（二）

吉さんは今年四十二歳、火事と喧嘩なら三里でも五里でも走ろふと云ふ大好きだ。吾輩は吉さんの手に這入つてから三日、今度こそ愈々酒代と爲つて酒屋の錢箱に轉居するだろふと、毎日覺悟して居つたが、四日目の朝、突然吉さんが熊本行をするので隨行を命ぜられた。其日は朝からどんよりと曇つて、そして時々糠のよふな小雨がパツパと降る、兎に角厭な天氣であつた。吉さんは吾輩等同僚十四五圓を懐中に捻じ込み、午前九時四十五分下り大牟田發三等車の一偶を占領した。車中は相變らずの繁昌だ。汽車が木葉驛に着く迄は天下は至つて太平であつたが、木葉より二人の男が吉さんの左右に

陣取つた。一人は二十二三の色の青白い病人候補生のよふな男、今一人は二十六七の壯士らしい學生イヤ學生らしい壯士と云つた方が適當であろふ、飛白の着物に汚れたる木綿の袴、膝の邊りに煙草の火の燒孔が散彈を浴びたよふに點々して居る、そして大きな櫻のステッキが、如何にも衣は肝に到りそふな豪傑。……其豪傑君はノツソリと這入つて來て吉さんの左に陣取り、持つて居た小さな風呂敷包を網棚の上にちよいと投げ揚げよふとした。ところが調子が惡くて其包が吉さんの左肩の上にコロリと落ちた、此時までグツスリ眠つて居つた吉さんは、大きな眼をボツカリ醒して大喝一聲『ヤイ何だい、人の上に落しかけやがつて……』とどなつた。『イヤ之は失敬と一言云つたら事は多分それで治まつたかも知れぬが、流石は豪傑で『何だ、態と落したぢやない、人聞きの惡い、大慨どなつたがよかろふ』と却て逆襲と來た。喧嘩なら飯より好きな横丁の吉さん、此儘默つて引込んでは横丁どころか大牟田全市の耻辱となると考へた、『何だと野郎落さんやつがどふして落ちて來る理由があるかい、不都合な……』『落た理由は地球に引力があるからだ、グス〳〵云ふ處があるかい』『引力?引力とは何だい引力とは、生意氣云ふない、汽車の中に引力のヘチマのてあつてたまるかい此野郎と云つたと同時に、吉さんの大きな拳骨は豪傑君の右の頰にピシヤリと爆發した、『ウヌ三ピン奴、打つ

たなと『云ふが早いか豪傑君の榮螺の如き鐵拳は吉さんの胸倉を掴んだ、時局は愈々重大となつた。乘客鮨詰の客車内に豪傑對吉さんの組打が起つたので、車中は突然米一揆の如き大騒動となつた。乘客はドヤ〳〵と立ちあがる、逃ぐるにも逃げられず子供は泣く女は叫ぶの非常なる混雜だ豪傑君の連れの男、即ち病人候補生君が黄色い聲で『オイ君、止し玉へ、止し玉へ君』と組打の仲裁に這入つたがこんな大激戰になつてはオイ君止し玉へもあつたものにあらず、殊にそんな小さな聲では、砲兵陣地で屁放つた程の影響もない。幸に向ふの隅に居つた二人の兵士君が引分けて呉れたので兎に角双方一時退陣となつた。吾輩は吉さんの懐中に在つたので、無論此騒動の渦中に投ぜられたが、財布が丈夫であつた爲め何等の負傷もしなかつたのは仕合せであつた、而し主人の吉さんは大きな瘤を二つ程製造してプップと怒つて居る。之が表向きになつたら、車掌君が來る、次の驛では巡査君が來る、二人共交番に引立られる處であつたが、豪傑君は『オイ奴、覺へて居れ』と捨臺詞を殘して植木驛で下車して仕舞つた。此時吉さんはヌッと立上つて『何だと野郎……ヘン横丁の吉さんの顔を覺へて居やがれ』と云つた時には、汽車はゴトと〳〵動き出して居つたので、戰爭は此處に愈々終りを告げた。要するに汽車の中だけは地球の引力も無い力が、太平無事でいゝよふだと吾輩はつら〳〵思つ

た。今日は吉さんも思ひがけない喧嘩の堀出しものがあつて定めし滿足であつたろふ。

《三》

午前十一時、汽車は上熊本驛に着いた。吉さんはボイと下車してトットと歩き出した。京町に這入つてから吉さんは思ひ出したよふに袂を探つたら、朝日が二三本グチャ〳〵になつて出た、『エヽいま〳〵しい』と獨言を云つて、不斗附近の煙草屋に這入つたら、やがて六十にもなろふかと思ふ粗末な老婆君が店に出た。吉さんは『オイ朝日を一つ』と註文した。婆君は暢氣な顔付で『ヘエ、娘は一寸其處まで行きました、ヘエお蔭でよふ賣れますばい、何あげますか』との返答には吾輩驚き入つてしまつた。イヤ主人の吉さんは吾輩以上に驚き入つたに違ひない、『婆さん、煙草だ、朝日を呉れ朝日を……』と例の氣象で險貪突に言つたら、今度は老婆君が驚いて『ヘエ……』と言つたまゝ不思議な顏付して居る。扨は此老婆君いよ〳〵聾であるなあと吾輩は鑑定した。癇癪持の吉さんと聾の老婆君、油斷をしたら又々談判破裂とならねばよいがと吾輩は多少心配して居つたが、押問答の結果、吉さんは無事に朝日一個を手に入れる事が出來た。吉さんは『エヽいま〳〵しい聾だなあ、オイ釣を

呉れ』と云ひつゝ、吾輩をピラりと投げ出した。すると老婆君は、手に取上げて暫く吾輩の姿を眺めて居つたが、何やらグズ〳〵小言を云ひつゝ錢箱に入れてしまつた。多分、吾輩の古ぼけた皺苦茶姿が氣に食はぬのであろふ、之だから無學の奴は困る、聯隊旗でも骨董品でも、古くなる程價値が在る事を知らぬから可愛想だ。

吾輩は吉さんと別れて愈々煙草屋の錢箱に轉居してしまつた、錢箱といつても此處のはミツワ石鹸の空箱で少々窮屈ではあるが、黴臭ひ古い板箱よりも却て住心地がいゝ。中には一圓紙幣が一枚五十錢紙幣が三四枚、其他取交へ四五圓も這入つて浮世話に餘念のない處であつた。吾輩は其時の浮世話を一寸諸君に紹介しよふ。皺苦茶になつた五十錢紙幣の曰く『折角紙幣の銘打つて此婆婆に出て來る上は、顔形から身體の格好が品能く生れねば駄目ですよ。私等だつて生れた當時は之程見すぼらしい姿でもなかつたが、此有樣を見てください、吾身ながら愛想が盡きるのです。如何に政府の粗製濫造とは言へ、ま少し位は體裁のつけよふもあつたのだろふにと思ひますよ、世間の奴等が誰一人褒めて呉るものも無いのです。夜店に曝した反物にだつて、之位のレッテルは貼つて在るとか、正宗瓶のレッテルだつてまだ〳〵ズツト上等だとか、どゞの詰りには私等に向つてとふ〳〵レッテルと仇名を付て

しまつたのです。思へば私等を拵へて呉た政府が恨めしいです』と此世を悲觀して居るのが如何にも可愛想に見へる。すると側から十錢紙幣がにじり出て『而し先生』――先生とは彼等小紙幣が上官たる吾輩等に向ての敬語であることを一寸紹介しておく――『世の中はそんなに悲觀するものでもありませんよ、婆婆と云ふのは人間と云ふ阿呆の寄合所、こんなことを云つては生意氣だと笑はれるかも知れませぬが、同じうき世も二た通り、浮いた〳〵で暮すが浮世、くよ〳〵云ふて暮すのを憂世と書くそふです。五十錢紙幣さんだつて其通りだから、吾輩十錢紙幣などは、婆婆の奴等の眼中には、木葉同樣にしか見へぬでしよふ、それを一々腹立てた日にやあ遣り切れませんわね……圓札先生、私等だつて此世に出た當時は隨分と面白い事もあつたのですよ。忘れもしません〇月〇日、或る銀行員の懷中に這入つて料理屋へお供と出かけましたね。處は名古屋の△△軒で、一流か二流かは知りませんが、兎に角ペチヤ〳〵としやべる藝者と云ふ動物が二三匹やつてまいりましてね、唄ふ踊るの大騒ぎをしたのです。すると銀行員殿が、紙幣を出して一枚づゝ鄭重に熨袋に入れてそれ〴〵藝者仲居の前に並べた、そこで一同は『大けに』『大けに』と最敬禮をする。それから丁度燃へ切れそふなランプに石油をさしたよふに、又一騒ぎバツとやつて銀行員殿が意氣揚々と凱旋された、後で一人が開封し

たら、吾輩がピョイと飛び出した。大きな熨袋で、てつきり一圓先生に相違はないと思ひ込んで居た彼等が、一杯食はされて呆氣に取られた顔付は見ものでしたよ、ハハハ……』と十錢紙幣馬鹿によくしやべる。吾輩は、仲間の浮世話を聞きつゝ、先刻の喧嘩の疲れでスヤ〳〵と眠つて仕舞つた。

(四)

突然、箱の蓋が開いた。そして白い柔い手が吾輩等を掴み出した。見れば十九か二十歳位の女で顔面の構造は老婆君が特別入念の誂へらしい、顔の面積の割合に鼻が少々小さく製造されて在るのはまだ〳〵不研究と云はねばならね、庇髪が三寸ばかり突出して居るのは電信柱と衝突しても、大切な顔に創を附けぬ豫防工事だなあと吾輩連りに感心する。兎に角煙草屋の看板娘としては誂へ向きだ、之ならば吉さんが『朝日を一つ』と云つても『ヘエ娘ですか』と老婆君が答へるのも無理はないなあと思つた。吾輩は小紙幣を取交へ五圓揃へて四十ばかりの女將さんらしい人に渡された、吾輩等は五圓紙幣先生と交換されて、今此女將さんの手に轉任したのだなあと知つた。女將さんは持合せのお世辭の全部を此店口に並べてイソ〳〵と出て行つた。

女將さんの宅は、スグ筋向ふの小さな宿屋である。宿屋は小さくても△△旅館と云ふ看板だけは思切つて大きい。吾輩は薄暗ひ帳場に運ばれ、古びた机の上にバラりと載せられた。吾輩は机の上からよいと店頭を觀察する。先づ、襖と障子が破れたまゝになつて居るのは、此處の主人が衞生家で、空氣の流通を計る爲めにわざと張らぬのであろふ。赤黑くなつた此家の疊は、親代々からの傳り物で、表を替へては先祖に對して濟まぬといふ祖先崇拜の奥床しい心根であろふと思ふ。要するに、いつぞや講談で聞いた水戸黄門が助さん格さんを連れて這入つて來るには最も適當の宿屋だなあと思つた、其内に吾輩等三圓六十五錢の一と連は、又々主婦さんの手によりて裏座敷に運ばれ、釣錢となりて客の前に並べられた。其お客様と云ふのは年の頃は六十に近ひ老人で、五分刈頭に顯髯がまばらに生へ、笑ふ時には眼が八の字なりに下り、兩頰が俄に膨脹して、大きな口の中に向ふ齒が一本チビりと缺けて居るのが頗る可愛らしい、多分前世は惠比壽様であつたろふと吾輩は思つた。此惠比壽君は、女將君から吾輩等を受取り、そして『ハハハ……』と一度大きな聲で笑つて、『お主婦さん、裁判所ちゆう處は、ゑゝ處ぢや御座りまつせんばいなあ』と話し出した。吾輩は此可愛らしい惠比壽君の口から、裁判所と云ふ言葉を聞こふとは實に意外であつた。『俺もあんた、此歳になつて始めて裁判ち

ゆうものに出ましたゝい、俺の村に些ともめ事が出來ましてな……ナーニあんた、借つた返したの事からですたい、……俺も其證人と云ふ譯でなあ、アハハ……』と又一度大きな聲で笑つた。『今日はあんた九時の呼出しだろふ、それであんた時間に遲れぬよふにと、昨日から此處に來て泊り込んで、今朝は夜明けから眼を覺まして、八時頃には行きましたゝい、それから役人の出るの待つて玄關の處に行きましたら、控所に控へて居れ――と云ふ事だ。それから控所と云ふ所に行つて待つたの待たんのであろふかな、田中どーんと大きな聲で呼び出されたのが、途方むにやあ、俺の時計で十一時たいアハハ……』と又一遍笑つた。よく笑ふ、愈々前世は惠比壽樣だなあと思つた。女將君は、左程珍らしい事でもないと云ひそふな顏付して、立場を失つてチョキンと座つて居る。すると惠比壽君は頓着なしに話を進める。『それから恐る〳〵中に這入りましたろふ、やがて神主のやうな役人さんがガチャ〳〵と出て來て上段に並ばれた時には、何ぞ惡るい事はしとらん俺ぢやけつど、こりや困つた事になつたわいと思ひましたなあ、それから虛言は申さぬと云ふ印形を押て、俺は正直に言ひました、何も彼も言つて仕舞いました』と今度はアハハ……と笑ふ代りにずつと聲を小さくして、『其訴へられた力は、實は其、俺の大事な門徒ぢやから、成るべくならばと思ひましたけつどん、虛言は言へん、

虛言ちゆうやつは決して言へんもんぢや……お主婦さん、裁判所ちゆう處に入ると、身体がすくばるよふな氣持がするなあアハハ……』と獨で笑つて『之はお茶代じや』と五十錢銀貨を一文茶盆に戴せた。今まで佛頂顏をして控へて居つた女將君は、急に笑顏を作り、俄に持前のお世辭を四つばかり並べて、早々退却した。九時の呼び出しが十一時となつては、二時間程時計が狂つて居る譯だなあ。裁判所の時計も一度修繕に遣つたらよかろふにと吾輩は思つた。時に惠比壽君が、先刻門徒と云つたのはどんなものであろふ、或は何處ぞの坊さんではなかろふか、そふだ時々思ひ出したよふに南無阿彌陀佛を云ふ。天資聰明なる吾輩は、惠比壽君は確に何處かの坊主君だなあと思つた。

(五)

惠比壽君は程なく宿屋を出た。そしてテク〳〵と歩いて上熊本驛に出た。吾輩は午前十一時に此驛に下車し、六時間後の今又此驛に歸ろふとは夢にも思わなかつた。午後四時五十二分と云ふ、下りの汽車に乘つたる吾輩の行先は一体何處であろふ。

吾輩は小さく折られて惠比壽君の巾着に入り、そして懷中深く這入つて居るので汽車中の觀察は出來

ない。幸に今度の汽車には地球の引力もなく、無事に進行するよふで、吾輩は安心してグッスり眠つて仕舞つた。何やら枕下で音がしたので、ボッカり眼を覺まし、ソッと巾着の中からのぞいて見ると、吾輩はもふ何處かの家に這入つて、そして明治の中世紀頃流行したよふな大形の銀時計と共に、机の上に戴せられて居るのだ。ハテサテ此處は一体何處であろふ、どふ考へても分からぬ。同僚の五拾錢紙幣の話に、何でも川尻驛で下車して、程遠からぬ在の村に來て居ると云ふ事だけは分つた。吾輩は例の通り室内を觀察する。床には徹山の大幅の孔雀が、偉そふに大きな尻尾を廣げて居る。頭が非常に小く、身体が馬鹿に大きいのは面白い出來榮だ、孔雀の内でも片輪の方であろふ、徹山と云ふ男は、片輪の孔雀を書くのがなか〳〵上手かつたと見ゆると、●●●●●と感心をして後を見ると、亂雜にかゝつた衣桁に鼠色の白衣と黒の法衣が見へる、惠比壽君は吾輩の鑑定通り全く住持君であつたのだなあと、吾輩の慧眼には自分ながら感心をした。住持君は勝手元で晩餐の一酌をやつて居るらしい、鍬燒の臭がプンと鼻を衝く、折から玄關に『住持さん居るかな、住持さん……俺たい、寺本たい』と案内の聲。吾輩はビックりしてしまつた、其聲の大きいのに吃驚したのだ、まさか大工の吉さんが、此處まで喧嘩にやつて來たのでもあるまい、兎に角最後の一句『俺たい、寺本たい』にウンと力

を入れて名乘りを揚げる處を見ると、何でも容易ならぬ人物だと思はれる。住持君は勝手元から『ヤレ〳〵、又あの醉拂いの理屈屋がやつて來た、困つたなあ』とブツ〳〵云いつゝ玄關に出て來て、『ヤア寺本さん、お珍らしゆう、サア、どうぞこつちにアハハハ……』と言葉の終りにアハハ……と高笑ひを附ける處は、餘程研究した應待法だなあと思つた。寺本君は『住持さん、そぎやん妙な顏ばせんてちやよかたい。俺は講祝に行つて今歸りたい、ナヽ永ふは居らん、一本出しなはり一本』と玄關元から燗瓶の催促をして、吾輩の居る座敷の床の前にズッと來て、跌座をかいて座り込んだ。見れば四十四五歳の聲の割には身體の小さい男で、額がピカ〳〵と禿上つて居る代りに、口髯と顎髯が顏の下半部を占領して、もの云ふたびに朱のよふな大きな口が、其髯の中に圓くなつたり長くなつたり、自由自在に動くのは甚だ奇觀だ。顏が遠慮なしに赤く、そして言葉が程能く捌けぬ所を見ると、講祝のメートルが隨分高く昇つて居る事が察せられる『住持さん、今日は裁判に行つたぢやにやあかな、苟くも一ケ寺の住職たるものが裁判に出るなど云ふ事があるかな……ナニ、證人で呼び出された、……證人でも罪人でも同じ事、今から馬鹿な事はしなさんな、俺は門徒總代ぢやから云ふ、住持さんエーかな』と云ふのが冒頭である。

（七）

證人でも罪人でも同じ事とキッパり判決を下した處が流石に寺本君だ。此論法で行つたら、隨分面白い議論が聞かれるだろふと、吾輩はジッと謹聽して居つた。寺本君は盃をグッと傾けて、『それはそれでゐゝが……今夜は例の本山の上納金の事に付て寄つたゝい、俺の村はどふしても此間あんたに納めたゞけしか出來ん、元來御本山にはどれだけ上げても同じ事、年から年中上納金〳〵と、そふは俺等も續かん、一体全体本願寺もま少し辛棒して貰はねば困る。ナニお借財？……お借財とは借錢の事だろふたい、借錢があるなら尙更辛棒が必要ぢやにやあかな。此世智辛い世の中に、末寺門徒から錢ばかりせびつて、佛さんの敎を廣むるなんて、そぎやん事が出來るもんかな。考へち見なはり甚だ怪しからん事だろふ。どふかな住持さん、』と寺本君の氣焰は出て愈々盛なりだ。住持君は醉つ拂奴が又例の說敎を始めたなあと云ひそふな厭な顏付して、『而し寺本さん、日本國中の寺々を御指配なさる御本山の事だからな、金無しには行かぬたい、御辛棒もなさるだろふけつどんナァ……マァゐゝ、マァゐゝたい、あんたの話は分つた〳〵ァハハハ……。』 すると寺本君は眼の球をグルりと動かして

『ナニ分つた？……イヤあんたの顏は、まだ分つたりそふな顏ぢやにやあ。俺は此寺の門徒總代だから言ふ。住持さん、あんた達もまちつと熱心にやんなはり、ェゝかな、今の坊を葬禮坊主と云ふ、葬式するばかりが坊主の勤ぢやにやあ、お釋迦さんの事は考へち見なはり、俺は釋迦一代記も讀ふだから知つとる。お釋迦さんは天竺の迦毗羅國の王さんの息子の悉達多と云ふ太子樣である。ェゝかな……』。 イヤハヤ吾輩は驚いてしまつた。門徒總代の醉拂いの寺本さんが、グビリ〳〵と盃を傾けながら住持君に向つて說敎を始めた。門徒が住持に說敎をするなんて吾輩には全く初めてだ、婆婆が開けるといろ〳〵と變つた藝當を見せられるものだなあと、吾輩は眠むいのも忘れて謹聽して居ると、時計が十時を打つた。住持君は益々困つた顏付して『寺本さん、モオェゝ分つたけん』と手を振つて連りに說敎中止を懇願したが、寺本君はそんな事には頓着なし、『分つたなら分つたでゐゝたい、……而し考へて見なはり、身は王さんの位を受繼ぐべき尊き太子樣に生れながら、人間の無常を感じ、三界無安猶如火宅といつて果ない此娑婆を厭はれ、迦毗羅城を拔け出して愈々出家をされた。そふだろふ住持さん、……そして華仙跌伽仙阿逞羅仙人など名高い人の敎を受け、それから五年六年七年と難行苦行を重ねられて、お歲が三十一で愈々悟を開かれ我比土安穩天人常充滿の大安樂地に赴かれた

と云ふ事、之が佛法の本家本元。……エヽかな住持さん。お釋迦さんがそれまでの難行苦行を考へち見なはり、今の坊さんたちやあ苦勞が足らぬ、死人の前に行つてグジャ〳〵〳〵とお經を讀むばかりなら俺でん出來る、どふかな』と念を押して冷ゑ切つた盃を又一杯グットやつた。

（七）

住持君は眉を八の字にして顏をゴシ〳〵と擦き『それはもふあんたの言いなさる通り……時に寺本さん、もう十時打つたわい……そろ〳〵、歸りなさらずば……』とちぎれはぎれに恐る〳〵云つた。すると寺本君は『なんてな、十時打つたから戻れ……戻れと云わんでももふ戻る。……而し住持さん、俺は門徒總代だから言ふとく。今の坊さん達はまちつと眞面目にやらにやあいかんばな、昔と今とは時勢が違ふ、昔ならば地獄極樂南無阿彌陀佛ばかりで坊主も出來た。隣りの仁助爺や、橋向ふのお夏婆のよふな人間ばかりなら、住持さんの屁の音聞いても、南無阿彌陀佛お有難ふ御座りますと、三突這いして手を合せて拜むだろふばつてん、今の人間はそふ云ふ調子にや行かんばな。ゑヽかな、……死人の前に行つて歸命無量壽如來云ふ事ばかり考へずに、ちつと生きた人間を濟度する工面ばしなはり、此世に迷ふとる人間がどれだけ居るか知れん。元來お經ちゆうやつが氣の利かん、南無不可思議光法藏菩薩因位時とは、あら一体全体どふ云ふ譯かな、俺どんが聞いたてちや、何が何やら薩張り分らん。折角永々と讀むからにやあ、誰でも合點の行くやふな文句を並べて讀んで聞かせたらよかりそふなもの、今の佛法は第一お經から書き直さんといかん、こらあ御本山で出來んちうなら、住持さん、あんたゞけでもまちつと分るよふに書き直して讀みなはり』とそれが殆んど命令的であるのには益々驚かざるを得ない。寺本君は德利を引寄せ、二三杯手酌でグン〳〵傾け『あんたも一杯どまあよかろふ、酒ちゆうやつは矢弘り相手がなからにやいかん、まあ一杯やんなはり』と盃を住持君の前に突き出し『住持さん、五六杯續けて飲みなはり、酒の力も他力本願ァハハ……阿彌陀如來の他力往生の御誓願は……』、住持君愈々以て驚いてしまつたらしい。『寺本さん、モーゑヽ……もふ大分遲い……宅も待つてだろふから戻つてはどうだろふかな…』と住持君額を撫でつゝ恐る〳〵懇願に及んだ。流石に寺本君は齒切れがいゝ、『歸ろふ、もふ歸ろふ……又ゆつくりと遊びに來る、エヽかな』と千鳥足にて坐敷より出て行つた。住持君は玄關迄送り出して、大きな息をホッと吐き『困つた大將だなあ』とブツ〳〵つぶやきながら勝手元へ行つた。寺本君が又ゆつくり來て他力往生の誓願がはじ

まつたら、住持君も定めし困るだろふと、吾輩は同情に堪へない。考へると、今日は朝から地球の引力で吉さんの喧嘩を見、今夜此川尻在のお寺に泊り、そして痛快なる寺本君の大氣焔を聞こふなどゝは、實際夢のよふだ。吾輩は古机の上に其儘眠つてしまつた。

〈八〉

翌朝、鐘の音にポッカリ眼を覺ました。住持君は御堂の佛壇に向ひ、しきりにグジャ〳〵とお經を讀んで居られる。成る程寺本君の話の通り、お經ばかりは如何に賢明なる吾輩にも一切分らぬ、お寺に來たので、久々振りに如來樣に敬意を表しよふと、ソッと御堂をのぞいたら、相も變らず退屈そふに立つて御座る。あの顏付が慈悲忍辱の相と云ふのだなあとつく〴〵感心はしたが、年から年中、兩手を擧げて法身說法の印を結んで居られるのは、隨分お疲れであろふと同情をした。寺本君は屹斗『奈良の大佛さんな座つて御座るばな、此處の如來さんも座らせた方がよふどまあるみやあか』なんて、時々住持君に言つてるだろふなあと吾輩は思つた。

其日の夕刻、始めて巾着の口が開いた。そして吾輩は二十錢銀貨と共に勝手元に持ち行かれ『魚もこ

ぎやん高ふなつちや、なか〳〵買ふちや食ゐんなあ』と云ふ住持君の聲を聞きつゝ魚屋君の手に轉宿した。買ふて食へんからといつて、坊さんの身でまさか捕へて食ふ譯にも行くまいにと吾輩は考へた、魚屋君は年齡五十ばかりの至つて正直そふな男、生臭い手で丁寧に吾輩をたゝみ、首からかけた木綿袋の中に入れ、二三度叩頭をして其儘出かけてしまつた。袋の口が長い紐でグル〳〵と卷かれて居るので一寸のぞいて見る譯にも行かず、魚屋君が何處を歩いて居るやら一切見當がつかぬ。魚屋君は疲れきつた澁色の聲を出して途々賣り廻つたが、それからとふ〳〵一つの商いもなかつた。魚屋君が宅に歸つたのは彼之七時頃でもあつたろふ、突然『平さん、あんたナァニしとつたかな、途方むにやあ……あんたが歸らんけん、まあだ飯も炊かれんたい、そしてまあた魚は殘つとるぢやにやあかな、今までかゝつて賣つて仕舞ふち戻らん阿呆てあるかな、途方むにやあ』と癇高い女の聲に、吾輩は到着早々から吃驚してしまつた。さて此女は一体何であろふ、平さんの母御であろふか、イヤそれにしては平さんと態々さんを附ける譯がない。第一聲が若い、娘であろふか、否や娘が親に向ひ名前を呼んで、こんなにガミ〴〵しかり飛ばす理由は無論ない。さすれば此女、或は平さんの妻君であろふかなあと推察した。ハテサテ吾輩は大變な家に舞ひ込んだものだ、妻君が此權幕であつたら、いつ

何時談判破裂夫婦大戰爭が起らぬとも限らぬ、困つたものだなあと懸念して居つたら、平さんは悠々迫まらず『ドーシぬしやあ……賣れん時には仕様はにやあたい』と一言云つたぎり草鞋を解いて足を洗つた、すると『ド――、錢から出しなはり、米買いに行かにやなんたい米買い――』と妻君の險貪突な聲が聞へる。平さんはそれには一言も答へず、やがて袋からバラ〳〵と疊の上に出して『それ米の代り』と五十錢銀貨を一枚投げ出した。妻君はブズ〳〵云つて出て行く。吾輩は此時初めて妻君の御面相を拜するの光榮に浴した。四十ばかりの小柄な女で、眼が小さく、鼻が割合に大きく、口をキリッと結び、薄ひ髪の毛をグル〳〵と櫛卷きにして居るが、髪の生え際と眉との距離が至つて近く、そして額に小さい青筋がかすかに二筋ばかり見へるのは、確に神經過敏症だと吾輩は診斷した。吾輩は例の通りジロ〳〵と平さんの住宅の觀察をはじむる。間口二間に奥行三間、そして店から裏へ半間の土間が通つて居るので、店が三疊勝手元が六疊きりの至つて小さい家だ。店には僅かばかりの駄菓子の箱と、其横に青い密柑と古い柿が十四五づゝ並べてあるぎりて、次の六疊には小さい佛壇と古い簞笥と、それから柳行李が一つ、其上には布團や衣裳が亂雜に積んである。粗末な宅だと云つては主人の平さんに對して濟まぬから、此處では至つて簡單質素な家だと云つておく。向ふ側は小さな鍛治

屋で、其隣は小間物屋のよふだ。吾輩は此家の掛札を見て、此處が飽託郡川尻町の裏通りだと知つた。平さんは如何にも疲れたよふに火鉢の端にグッタリと坐り込み、殆んど粉になつた煙草を二三服スパ〳〵とやつて天井の隅を眺めて居る。

(九)

やがて妻君が歸つて來た、そして小さい眼で一寸平さんを睨んで、『コウあんたくさい何ば考へとるかな……火どん焚きつけときあよかこて、こふゆふ氣の利かん人ちゆうはにやあ』と又頭から嚙みつけた、すると平さんは澁々と竈の前に行く、天下は至つて太平である。兎に角、妻君の權力が二三ヶ六坪の家一杯に廣がつて、亭主の平さんの權力は土間の片隅に縮こまつて居るやふな始末だ。要するに妻君は女權擴張論者で、内閣が今から五六度も代つた頃には、女代議士の肩書持つて、必ず天下に旗擧でもするであろふ。女代議士もいゝが、一日魚を賣り廻つて、毎日〳〵綿のよふに疲れて歸る平さんが可愛想だなあと、妻君には秘密でちよいと同情して見た。程なく飯が出來た。前の小皿には江鮒の煮付が半切づゝ載つて居る。十燭光の電燈が淋しげに室内を照して居る下に、平さんは大きな欠

伸を一つしてうまそふに箸を取つた。妻君はもふ其時は一杯平げた處であつた。平さんが一杯食ふと妻君も又一杯、平さんに負けず劣らず能く食ふ、亭主に負けては、女權論者たる自分の權威に關すると思ふて、こんなに熱心に食ふのであろふ。平さんが食事を終つた頃、戸口がガラリと開いて『御免』と云つて這入つて來たのは髪を小奇麗に分けた二十八九歳の小意氣な男。木綿の單衣の上から紺の捻袖を羽織り『ヤア平さん、毎日お疲れだろふ、朝も早ふから能ふ身体も續きますなあ』と至つて親しげにものを云ふが、傍にパクついて居る妻君に對しては一口も挨拶せぬ。それがグツト妻君の癪に觸つたらしい、屹と向き直つて『そらああんた、あんたたちがごつ鋏一本で渡世しきるごたる人間なら八時迄でん九時迄でん朝寝してよかろふばつてん……宅邊なそぎやん譯にやあいかんたい』と大きな險突を食はせて、白い眼でジッと睨んだ。睨み方はうまいが、折角の事にま少し眼が大きかつてほしいなあと吾輩は傍觀して居つた。小意氣な捻袖君は、そんな眼には一切不關焉たりで『而し平さん、あんたがごつ辛棒する人には屹と運が向いて來るばな……亭主にばかり働かせち、内に居つて矢釜しゆうばかり云ふち、出しや張るよふな我儘者は……』と言ひかけて、何思つたか俄に小聲になつて『ナーニこらあ世の中の假令たい……』と今度は妻君の横顔をジッと睨んで『時に此間、此處のお杉

さんに嬶が振替ちおいた金なあ、今夜入用のあるけん都合んつくなら返しておいて呉んかな』と穏かに催促した。平さんは氣の毒そふに『ハイ〳〵あの三圓の方だろふ、ほんに此間はゐゝあんばいでした、お蔭で其時や助かりました。早ふ返さにやならんと思ひながら……途方むにやあ延引して……』と丁寧に頭を下げた。すると傍より妻君が『善藏さん、あんたがごつ五圓掛の講の三つも加入つて居るごたるもんの、今夜三圓の錢が無かてなあ、へン、そらあ途方むにやあなぐれよふなあ、……催促に來んてちや、まあだ三圓位の金は引かけはせんけんなあ……』と又一發險突を食はせた。妻君の鉾先は柔かいよふでなか〳〵鋭ひ。平さんは錢袋の上に戴つて居る吾輩等を取上げ、丁寧に皺を伸べつゝ『お杉、そふ云ふ事ばぬしが言はんでんゐゝたい』と吾輩等三圓に十錢銀貨一個を添へて善藏君の前に差出し『俺の方から返しに來にやならん處に、わざ〳〵來て貰ふち濟まんだつたなあ。其時やお蔭ぢ助かりました。何かお禮せにやならん處ばつてん……十錢だけでん取つておいてくだはり』と平さんはなか〳〵丁寧だ。すると善藏君は『ナーニ利子のなんのて入ろふかな……平さん明日歸りにや寄んなはり、久し振に一杯やろふ、俺も晩酌せんな待つとるけんほんに來なはりよ……毎晩宅にばかり居るよりも氣の晴れちゐゝばな』と親切に云つて、吾輩等を握つたまゝ挨拶もそこ〳〵出

て行く。吾輩は妻君の權幕には恐れ入るが、平さんに別れて此家を出るのは何だか名殘り惜くてならぬ。善藏君は力手を懷中し『去りし女房の片身とて、行燈に殘せし針の跡……』と黄色い小聲で唄ひつゝ、横丁より本通へ折れた。そして△△床と書いた硝子戸をくゞつた時に、成る程善藏君は、鋏で渡世をする理髪屋の主人公だなあと知つた。

(十)

善藏君は職場の横の小さい箱の引出に吾輩等を入れて、其儘勝手元に行つた。吾輩は引出の隙間より例の通り一寸職場の模樣を視察する。間口も廣いが一寸小奇麗、大きな姿見が三つ、其前には欅と公綠樹の盆栽が二タ鉢、そして姿見の上には『交友須可帶三分俠氣、圓了書』と云ふ額が掛つて居る、そしてナポレオンの石版刷の肖像額が右側に陣取つて居るのはいゝが、其額の下の隅に赤坂藝妓萬龍の繪葉書を貼つて在るのは甚だ振つて居る、ナポレオン君も朝から晩まで床屋の番ばかりさせて置ては淋しかろふから、萬龍君をお伽につけておこふといふ善藏君の粹を利かした心盡くしであろふ。勝手元には善藏君の聲、『あの嬶やつが顏見ると腹が立つ。此間貸した三圓も遮二無理今夜取

らんてちやよかつたばつてん、あの頑垂れ嬶の顏見たりや癪に觸つたから催促してやつた、而し平さんが斷り言ふて返した時には氣の毒でしよふがなかつた。平さんはなか〳〵正直だ。ほんとに佛さんだなあ、』平さんが佛樣であることは始めて知つた、そして其佛樣が魚屋商賣と來ては、一寸眼先きが變つて面白いなあと吾輩は思つた。すると女の聲で『あんたがお常〳〵と云ふて始終妾は叱るばつてんか、平さんの思ひするなら、妾が正直かけんあんたはほんとに仕合せばな』とは確に妻君らしい、今の口調によると、此處の妻君は女權擴張論者ではないよふだと、よふ〳〵安心した。やがて硝子戸がガラリと開いて、四十二三の色の黑い、伊賀栗頭の變な顏付の男が這入つて來た善藏君は勝手元から出て來て顏見合せ『ヤァ鶴吉さんだつたなあ、あんた八幡からいつ歸つたかな』『八幡に行つてとつたばつてん一向面白ゐ事もにやあけん二三日前に戻て來た、……時に相變らずあんたも元氣だろ』『大元氣たい、ヤァあつちに寄んなはり、久し振りに一杯やろふ』善藏君は面白い男だ、人を見ると必ず一杯やろふと云ふ。住持君が言葉の終りにアハハ……を附けると同樣に善藏君は挨拶の終りに一杯やろふを附ける、之も變つた應待法だなあと感心して居る內に、鶴吉君は店口ににじり上つて火鉢の前に座り込んだ。之からほつ〳〵二人の會話が始まる。

『八幡の方の收賄事件もゑらい事だつたなあ』

『ゑらい事どころかな、技師の萩原博士さんに大倉組と高田商會からの袖の下が十萬圓ちうこつだるもんなあ、布目四郎吉さんと鑛務部長の瀬尾さんも矢張り同じ穴の狸で、袖の下が一切で二十萬圓以上と云ふは、途方むにやあ事ぢやにやあかな。頭の大かりや太かだけ惡い事も遣口が違ふ技術で御座る博士で御座ると大きな顏して威張つて御座るが、札束の前には義理も恥もない。十萬と云ふ賄賂ば摑んで、知らぬ顏の半兵衛さんで逃ろふとは少々虫がよすぎる。丁度製鐵所の起業祭で、八幡一杯ひつくりかやるよふな大賑合の日が、其裁判だつたたい。善藏さん娑婆の事は妙な因緣たいなあ……』

と鶴吉君は一寸憤慨した體で、

『善藏さん、下々のものがちよいとこふ金の一圓も並べて丁半やつても、半年か一年の懲役細工だろふ、其割合からすると萩原さんたちや、どふしてん終身懲役じやなあ、……イヤこういふ事をした役人の分な、思い切つて遣付にやあいかんばな。一体頭の太ゑ奴共は押へ付くるものが無し、惡い事の仕安かけん、以後の見せしめにウンと遣付とくがよか、こぎやん事ば思ふと、正直

正當に痩腕打振てセツセと働く俺どんが方が、人間の價値は却て在るかも知れんばな、ナァ善藏さん』

すると善藏君は、如何にも我意を得たりと言わんばかりに、一膝乘り出し、

『そふ〳〵……一体官員の議員ので、員の付く人間は油斷な出來んばな、油斷をすると日本中の人民の頭に嚙み付くからなあ、京都にも、市會議員が三十何人繩付きに爲つたと云ふ話。今の調子で行くと日本な鼻髯の奴共が潰して仕舞ふ事に爲るかも知れん。一体議員の選擧なんて云ふやつがおかしゆうてならん、金さゑあれば新聞なさかさまに讀む人間でん議員にならるゝけんなあ。鶴吉さん、俺あこふ考ゆるなあ、國會議員でん町會議員でん同じ事がな、選擧の時やお互ひ人民の方から打揃ふち行つて、今度はぜひあなた一つ出てくだはり、此地方の人民の總名代にぜひ一つ議員に爲つてくだはり、どふかよろしゆうお賴みします、と頭を下げて賴まれて出にやならん筈だろふ。それがどふかな、候補者の方から何卒よろしゆうお賴みしますと、床屋風情の俺どんがごたる者にしやが、頭ばピヨコ〳〵下げち、三突這して拜みに來らすちゆう娑婆だるもんなあそふして出來た議員さん達だるもん、紙幣束の前にや義理の張のてあろふかな、袖の下握る位の

事は平氣の平座で恥とも思わんたい。之から先きは人民も、僅かな錢金に迷はず、しつかりはまつて上等の議員ば造るごつせにやいかんばな、ナア鶴吉さん』

『あんたは感心。偉い。やつぱりお互ひ人民がおぞみつかにやあいかんなあ、……』

吾輩は、隱れたる政治家鶴吉君と善藏君の明論卓說を傾聽しつゝ、床屋の小箱の中に一夜を明かした。

× × × ×

吾輩は翌日樽代と爲つて水引をかけられ、善藏君に連れられて隣村區長君の宅に祝儀に行き、それから魚屋君の手に渡りて熊本に舞ひ込み車夫、工夫、書生、乞食、定期師、仲居、藝者、舞子、さては肺病患者の手に渡りて熊本病院住ひをした事など、物語はまだ〳〵澤山續くが、ちよいと一服して何れ氣の向いた折に、再びしやべるとしよふ。

【大正七年十月七日】

屁理屈

オイ〳〵そんな馬鹿口を叩くのは止せて？……止せと云やあ止しもしよふが、而し俺の口で俺が叩くのに近所近邊から干渉はいらぬだろふ……俺は叩くよ。何だ目出度い正月早々だから屁理屈は止せと云ふのか。オイ君、正月早々には屁理屈を並べる可からずと云ふ御法度でも出たのかい、ヘン、そんな法律はまだ日本の略暦には載つて居ないだろふ、無論正月は目出度いに極つてるサ。俺の屁理屈だつて、目出度い餘りに此口から無性に飛び出すものだと思へば大した罪はないだろふ。俺の放屁と屈理屈は、目出度い時には何時でも飛び出すにきまつてる。屁理屈屋の俺だつて、正月は矢つ張り無性に目出度いサ。元旦の屠蘇機嫌に一枚張りの五紋付で、ウンと構へて居る處に、郵便の聲男ましく、年賀狀がバラ〳〵と舞ひ込むなんて、何とも言へない目出度さだ。……何だと、謹賀新年が何百枚舞ひ込んだつて、何の利益にも爲らぬぢやないかと云ふのかい。ヘン、それだから話せぬのだ。考へて見玉へ、日本國中は愚な事、唐天竺の隅々迄散らばつて居る幾百の友人知人が、日出度い元旦

に打揃ふて、お目出度ふ〳〵とやつて來るのだと思へば、こんな嬉れしい事があるかい。五十年前を考へて見るがいゝ、僅か五厘錢三枚で百里の友に年の始の挨拶するなんか、將軍さんの御威光だつて出來る藝當じやなかつたよ。……ナニ、要するにそれは虛禮だと。……ヘン、そかだから尙更屁理屈が並べたくなるワイ。年賀狀が虛禮なら、婚禮に行つてお目出度ふと云ふ挨拶も虛禮だ。葬式に行つて御愁傷でと弔詞を云ふのも全く虛禮だ。毎朝出會ふてお早ふと云ふのも虛禮だ。そんなに虛禮が嫌いなら、啞者に爲て岩窟の中に座禪をして居たらいゝだろふ。……而し待てよ、俺も年賀狀に付て萬更苦情が無いでもない。當方から賀狀を出して先方から返事をよこすに、相變らず謹賀新年一月元旦ですまして居る、先生が居る郵便局の消印は立派に一月五日とあるのに、矢つ張り一月一日の日附でやるなんて少々痛み入らざるを得ない話だ。答禮なら答禮らしく其日の日附で尋常に書いたらよさそふなもの、俺は正月早々から、こんな日にちの遣繰は嫌いだワイ。……而し折角年賀狀を出したのに、ウンともスウとも返事をよこさぬ奴が在る、こいつは益々怪しからん。抑々人がお目出度ふと挨拶をしたら、お目出度ふと返答位はするのが道だ。それに一言半句の返事もせずに他所打眺めてツンと構へて居るなんて、甚だ以て怪しからん次第だ。こんな先生こそ盲啞學校に入れて、いろはのい

の字の點々の打ちよふから敎へてやらねば、其儘では此世に通用せぬ人物だと思ふがどふじや。……ナニ文句は止せよと云ふのか、……なか〳〵以て止さぬワイ。今年は午の年と云ふのじやないか、馬が走り出したらオイソレと止りはせぬだろふ、俺は痔馬で一生懸命に今走つて居る處じや。……今年は午の年だと云つて、婆婆の有象無象が大騷ぎを爲し、新聞雜誌は勿論のこと、店先の繪葉書まで馬の繪を刷り出し、何れを見ても馬の話、ヤレ支那の何とか帝が其愛馬をどふしたとか、昔々或る處に馬好きの老爺さんありとか、百年も千年も昔の昔の昔話などクド〳〵しく書き立てゝ居る。紙價暴騰の今時に、こんな呑氣な事を書く者も書く者だが、安閑として讀んで居る大人の顏が又馬の顏のよふだ。オイ〳〵、まあ考へて見るがいゝ、年の始の元旦にこそ、それ午の歲だ、一も馬二も馬で、馬でなければ夜も日も明けぬよふに大騷ぎに騷いで居るが、此處四五日も經つたら馬のウの字も言わぬだろふ。之ぢやあ折角の馬公も一向有難くないぢやないかい。オイ〳〵其處等の雜誌屋君や學者先生そんな昔々なんて馬に因んだ昔話など拾ひ集めて書く暇があつたら、ま少し眞面目に馬の研究でもしたらどふだい。骨と皮とで製造したやふな痔馬が、幾千斤の荷馬車を挽いてピシヤリ〳〵と臀を叩かれ、此寒天にさゝふ流汗淋漓として川尻往還をトボ〳〵歩いて行くのが君等の眼には見へぬのかい。

働くだけ働かせ、使ふだけ使ふて、仕舞には屠牛所へ叩き賣られる、之で馬公も嬉しいだろふかい。折角午の歳を迎へて、馬に因んだ昔話なんか書いて喜ぶよふな暇があつたら、少しく馬の優遇法でも講究して呉れたらどふだね。畜生だと思つてへン、あんまり馬を鹿にしては貰ふまいよと、馬に代つて俺が臭ひ屁理屈を並べておく。一体全体此頃の雑誌屋なんて云ふやつが俺は氣に食はぬ。まだ其月の半にもならぬのに、もふ翌月發行の雑誌を大手を振つて賣出して居る。それが子供の雑誌ならまだしも、政論とか公論とか、堂々と大きな名前のやつまでが、生れぬ前月から此婆婆に飛び出して居るなんて、如何に金がほしい爲とは云ひながら、あんまりヅウ〳〵しいぢやないかい。此儘で行つたら後には正月元旦に二月の雑誌が飛び出すよふになるかも知れぬ、世の中はまるで無茶苦茶ぢやわい。俺の屁理屈はまだ〳〵澤山あるが、止せと云ふなら之で止す。何れ其内、君等がびつくりする程、ウンと屁理屈を並べてやろふわい。【大正七年一月一日】

呈する書

臺所のお鍋君に

玄關番の書生より

お鍋君足下。足下は當△△家臺所の城主として、石臼大の臀を左右に動かしつゝ常に活動せらるゝの女丈夫、吾輩は僅に當家四疊半の關門を固める玄關番。而も足下の恩惠による三度の飯にて僅に浩然の氣を養ふ五尺六寸の偉丈夫、炊事場の隅より竈の端に至る足下の領土は元より廣し、而も朝の味噌汁晩餐の江鮒の煮付の味まで足下の右手五本の指によりて甘きも辛きも定ると思へば偉大なるは足下の腕なり、吾輩は常に櫻島大根的足下の雄大なる足を見て地の廣きを思ひ、泰然として常に天を仰げる達磨的足下の鼻を見て宇宙の廣大なるを感じ、世界的の女丈夫として常に無限の敬意を表しつゝある事を足下に對し告白す。雷の如き足下の鼾聲は以て隋氣滿々たる政界の眠を覺すに足るべく、井戸端會議に於ける滔々懸河の雄辯は喋郎島田テオドラ尾崎の輩をして三叉を避けしむべし、足下が面

積六平方寸に近き顔の相合を崩して笑ふ時には閻魔大王も三尺の涎を垂るべく、足下が一度び怒り摺古木を叩いて八百屋の源公を睨まれる時には惠比壽太黑も高尻からげて逃げ出すべし、偉なるかなお鍋君足下、吾輩が世界的女丈夫として謹で足下に敬意を表しつゝある所以敢て此處に在り。然れ共足下よ、吾輩の足下に對し遺憾に絶へざる事只一あり、曰く居候たる吾輩を遇するに其餘りに無情なる事之なり、何をか無情と云ふ、曰く朝夕の飯の菜の盛り方の餘りに僅少なる之その偉大なる足下の性格に對し甚だしき矛盾にはあらずや、例令當家山の神の御命令なり共ま少し位量を增す事は足下の手加減により敢て易々たる事たるべし、一昨夜の煮付は何ぞ此くも小さかりしや、昨晩の竹輪は僅に三切に過ぎざりしにあらずや、量の多寡を論ずるの資格なき居候たる吾輩は膳に向ひ唯々足下の膨大なる顔を拜し痛恨悲憤熱涙滂沱たるのみなり。足下よ、昨日客來在りし時の如き、菓子盆に殘りし三切のカスティラの內唯其一片を吾輩に惠まれしならば吾輩の光榮と幸福とは如何ばかりなりしならんに、無情なる足下は遂に三切共に足下の口に頰張られたり。足下よ、每夜勝手元に居眠りし玉ふ程暇ある足下なれば、吾輩の夜具のほころびも一度位は縫ひ吳れ玉はりしとて敢て足下の人格に關する事もあるまじ。

賢明なるお鍋君足下よ。吾輩當年二十四歲、笈を負ふて東京に遊びしも幾度か落第を續け轉々流浪遂に當家の玄關番を拜命す、然れ共吾輩をして一生を玄關番にて終るものと安買し玉ふ勿れ、韓信も一度は股を潛り秀吉も一度は草履を摑めり、大に伸んと欲するものは大に屈すとの言は全く吾輩の現在と將來とを語りしものたるべく、猫も杓子も大臣と爲る今日の世の中なれば吾輩も遠き將來に於て必ず一度は天下の權を握るに至るべく、吾輩に對する一片の菓子の恩惠や飯の菜の盛方は今日に於ては足下の爲めに全く沒交涉なり、然れ共吾輩一朝風雲に乘じて臺閣に立ちし曉には、足下が今日の待遇如何は足下の爲に必ずや重大なる利害の關係と爲りて現るべき事を賢明なる足下に對し敢て說くの必要あらじ。吾輩は賢明なる足下の一考を煩し度く謹で茲に一書を呈す恐懼謹言。

【大正七年六月二十五日】

若き奥様へ
下女お鍋より

一筆染しまいらせ候、妾こと何事も辨へぬ山出しの僻に奥様に對しかよふなること申上候ては、如何

ばかり御腹立ちあらせられ候ならんとは萬々承知いたし居候へ共、思いし事を胸に秘め能はぬ生れ付きにて候得者、拙なき筆にて思ふが儘に書き連ね候段何卒悪しからず思召の上一と通り御覽下され度御願ひ申上まいらせ候。さりとて改めて申上る程の事には無之候得共第一に妾の心苦るしく存じ候事は奥様の朝夕の御小言にて候、『今朝の御飯は大層やわらかい事ね、こんな御飯は食べられはせないじやないか。オヤ〳〵此お茶の辛いこと、なぜ砂糖をま少し澤山に入れないかい』といつも〳〵の御叱り言、元より不束なる妾にて候得者何事も御意に叶わず御叱りを蒙るも皆妾の心の足りない事故と存じ露程も御怨みは不申度得共、今度は八百屋が來り候とて『オヤモー薪は燃いて仕舞つたの、オヤ〳〵砂糖も無いの、お鍋やおまるはどふしてそんなに砂糖を使ふの……』といつも〳〵の御尋ね心狭き妾には身を切るばかりに心苦しく存じ居まいらせ候、高等女學校とやら御卒業あらせられ御料理の事などは一しほくわしく御承知遊ばす御身の上なれば、僅かばかりの砂糖を毎日澤山づゝ使つて十日も二十日も減らぬ力法等定めし御存知にて在らせられ候ならん、何卒御教へ玉り度御願ひ申上まいらせ候、又一つの御願は、奥様にも朝夕親しく御飯の仕度など御さしず下され候事は相叶ひ申間敷候や、さすれば砂糖や醤油の使ひ方なども御意に叶ひ二つにはお菜の味も思召に叶ひ申すべくと存じ

居まいらせ候、毎朝お布團の中よりお鍋や御飯はまだかゐ、お汁はもふ出來たのかいと仰せられお起き遊ばすよりも今少し早く御起床遊ばされ彼之と炊事の御指揮など下され候方御身休の爲めにも宜しかるべくと存じ居まいらせ候、また旦那様には毎日お役所にお勤め遊ばされ、日ねもす御辛働なされ候御事故、御夕飯の御肴として昼晩料理屋より御取寄せ御もてなし遊ばされ候御志は旦那様も定めし嬉れしき事に思召され候ならん、さりながら毎日料理屋へ御注文遊ばすよりも奥様が學校にて御習ひ遊ばされし御手際にてお手づから御料理遊ばされなば旦那様にも一しほ御喜びあらせられ又は經濟とやらにもよろしく奥様御健康の御爲めにも此上もなき御事かと存じ入まいらせ候。尚ほ又いつぞや御使にまいり候節さる處の御隠居様がお話遊ばされ候に『主人や子供が汚れたる衣裳を着て居るのは、其家の妻のだらしなき事を廣告するよふなものじや』と仰せられ候が之は御尤ものお話のよふ存じ入まいらせ候、御屋敷に於ても汚れし御衣裳等は何時にても鍋やこれ〳〵を洗つておけよと唯一と口仰せ付け下され候はゞ毎日にても御洗ひ申上ぐべく候に、奥様のよふに今日此頃の時候に汚れし御衣裳を部屋の隅に山のよふに御積み重ねられ候ては無暗に手に觸れ候事も如何かと御遠慮申上げ如何とも致し方なく存じ入まいらせ候、毎日お湯あがりに旦那様や坊つちやまに糊の附きし御

浴衣差上げ給はらば如何ばかりか御着心地よく在らせられ候ならんかと存じ上げまいらせ候、いろ〳〵とはしたなき事のみ申上げお氣受も如何かと誠に〳〵恐れ入りまいらせ候、而しながら之もお鍋が醉狂よと思召し下され何卒御とがめ下されまじくよふ、くれ〴〵もお賴みまいらせ候可祝。

【大正七年六月二十六日】

藝者裙に百姓の悴より

藝者裙足下。吾輩は益城郡の山奥に育ちし土百姓の悴なる事を告白し、茲に足下等に對し謹で一書を呈するの光榮を有するものなり、土百姓の悴たる吾輩が足下等に書を呈する之甚だ僭越なる事を知る、乍併足下等よ、土百姓の吾輩なりと雖も田舍に於てはハイカラの一人なり、此頃生へし鼻下の粗髯と村の理髮屋が全力を注ぎて摘みし頭髮の分け具合、之れだけにても既にハイカラの資格在り、況や外國出稼より歸りし兄が着古しの脊廣服を着用せし折など村の娘等が養蠶教師と間違へしも又決

して無理ならぬ事なりと信ず。吾輩は村に於ても相當の物知なり、されど二十八歳の今日まで未だ藝者君なるもの丶聲咳に接せし事なく、之實に吾輩千秋の恨事とし遙に足下等の雷の如き艶名を聞て朝夕敬慕惜く能はざりき。然るに本年△月△日吾輩は十年振に熊本の土を踏み一夕友人に招かれて旗亭○○に飲み、始めて足下等の芳顏を拜するの光榮に浴せり、絹摺れの音さやかに襖細目に『今晩わー』と現われ玉ひし時には、さながら馬頭觀音の出現ましませしかとばかり平素沈勇なる吾輩も思はず合掌三拜せり、

藝者君足下。足下の腕は肥料の足らぬ夏大根の如く小なり、而しながら此纖手能く堂々有髯の男子を奔弄す、何ぞ其力の强大なるや、足下の眼は我村の校長先生の飼育し居れる洋犬のそれの如し、而しながら此眼幾度か開けば六尺の男子君の前に平伏す、足下の口はちん鯛のそれの如し、されど此口一度び開けば家屋倉庫田畑に至るまで呑み盡すの力ありとは、君の口や何すれぞ此くも神通不可思議なるや、奇術師天勝は有謂藝當を演じ可愛らしき少女を催眠術にかけると聞く、されど足下等が堂々たる有髯男子を催眠術にかけ、而して田地田畑を鵜呑にするの大藝當に比べては到底お話にならざるなり、然るに世人、微々たる手品師天勝に向つて奇術師の稱を與へ、足下等の如き大奇術師に向つて藝

者と云ふ、抑々之れ矛盾の甚だしきものにあらずや。

藝者君足下。足下等が客席に待するや、お客たる吾輩等には尻打向け喋々として鴈次郎を談じ吉右衛門を論ず、之れ偏に足下等が藝術を愛する所以の然らしむる處なるべし、然れ共大枚の線香代を投じて安閑として役者の惚的藝術談を聞かされるお客たるもの又幸なる哉。

藝者君足下。世に職業の數多し、然れ共足下等の職業程ゐらきものはあらざるべし、堂々宴席に這入つて大に飲み且つ大に食ひ、しやべつて唄ふて大騒ぎして、油斷をすればお客様を尻の下に敷島煙草の煙と化す、此の如くして一時間に大枚六十錢の金を掴む、一時間六十錢とすれば一分時間に一錢なり、足下等が放屁一發する時間にさゐお客は獨ほ幾厘かの報酬を仕拂ひつゝあるなり、足下の力も亦偉大なる哉。

藝者君足下。世人足下等を目して紅裙と云ふ、吾輩淺學にして其何故なるかを知らず、計らざりき、足下等が大に飲んで盛んにメートルを上げ猿の如く眞赤な顏をしてキーゝと騒ぐを以て紅の裙と名けしものなるべしと吾輩始めて知るを得たり。吾輩は親しく足下等に拜顏の光榮に浴し村に歸りて大に自慢し得るに至りし事を感謝し、茲に謹で足下等の誤發展を祝し、併て足下等の爲に鼻下長連の益々繁殖せん事を祈る、妄言多謝。

【大正七年六月二十七日】

若き奥様に
元の女中竹より

一筆染しまいらせ候。御屋敷へ御奉公中は一方ならぬ御世話様に相成り殊に奥様にははしたなき妾に一しほの御情をかけ下され山より高き御恩の程身にしみ〴〵誠に難有存じ上げまいらせ候。さてとや不束なる妾こと最早御暇頂き候、後にてかゝること申上げ候ては思召の程も如何かと誠に恐れ入り候得共、奥様には旦那様との御仲かねて御睦まじく在らせられず淋しき御家庭の中に日毎に打しほれ玉ふ御姿を思ひ出で候毎に、御行末の事など案じ候て胸も裂ける思ひ致居まいらせ候。いつもガミ〴〵と御叱り玉ふ旦那様の御心いとゞ恨めしく、元より御無理のことのみ仰せられ候こと數々多くあらせられ候へ共、元はといへば奥様にも亦幾分の御罪あらせられ候事かと存じ上げまいらせ候。

何事も夫に從ふが妻の道とやら、奥様にも旦那様の御氣質を充分に御呑み込み遊ばされ、例令多少御無理の御言葉あらせられ候ても唯ハイ〳〵と御從ひ遊ばされなば迚もかゝる淋しき御家庭とは相成るまじくと存じ入りまいらせ候。妾も是迄二ケ年の間御奉公申上候得共、旦那様がお役所よりお歸り遊ばされ候折などまだ一度としてお玄關にお迎へに出でさせられし事もなく、お歸りのお時間が遲かりしとて御腹立ちなされては錄々御挨拶さゑ遊ばされず、如何の思召にてあらせられ候や、旦那様方には御交際とやらもいと廣くあらせられ候御事故御用事も多く時折には夜も遲く御歸り遊ばす事もおわし候ならん、一夕の御宴會に親しき御友人方と樂しく御召あがり遊ばされ面白き御機嫌にて御歸宅なされ候折など、奥様がすぐにむつかしき御顏色なされ『モオ何時と思つて居らつしやるのお酒ばかり飲んで仕様のないお方だね』など、部屋の内よりブツ〳〵御小言を並べて御起き出でなされ不性無性に冷へ切りし鐵瓶の火をおこし玉ふなどの事あらせられ候故、折角の御機嫌を損じ『エヽモー小言は聞き度くない』と厭な御感情がすぐに御頭に御浮びなされ、内に歸つたとて一向面白くもないとて二度より三度、三度より四度と宴會の御度毎に御歸りの次第に遲く相成られしものゝよふに察し居まいらせ候。旦那様御歸りの御遲かりし折などは格別御親切に御取持ちなされ、松風の音も

凉しき鐵瓶の湯氣の煙もいとのどかにお歸り遊ばせお茶召しませと、御言葉やさしくにこやかに御取持ち遊ばされ候はゞ、かねてより賢き旦那様にて候へば必ず嬉しく思召され、如何よふにかお喜びなされ候ならんにと御察し申上まいらせ候。一体に殿がたは御氣象も男々しくあらせられ候へば御機嫌あしき折節には自然にお言葉も荒々しく仰せられ候事もあらせらるべく、かよふなる折に奥様のよふにそろ〳〵御理屈を仰せられ候ては益々御氣色を損じ玉ふのみにて候へばか、るつて慇懃に御謙り遊ばされひとしほ御やさしくなされ候方御爲めなるべく『夫若し腹立ち怨る時は恐れて順ふべし、恕り爭いて其心に逆ふべからず、返す〳〵も夫に逆ふて天の罰を受くべからず』と女大學とか申す書物に書いてあり候由いつぞやお隣の御隱居様よりお話に聞きはべり申候。横文字の文または新派とやら申す和歌など御究め遊ばせし奥様に黴の生へたる女大學など取出で申しさぞ〳〵生意氣ものよと御さげしみ遊ばされ候ならんと誠に恐れ入り申候はしたなき賤の女の繰言、萬に一つも御聞き濟み下され候はゞ不束なる妾の喜び之に越す事無之、さりとて五月雨の田圃に鳴く蛙の聲と御聞流し下され候ても決してお恨みは致すまじく候。申上度き事は數々有之候へ共まわらぬ筆のはづかしく是にてお暇申上候。返す〳〵も御身御大事に遊ばされ度く神かけて祈上まいらせ候可祝。

【大正七年六月二十八日】

お客様に藝者より

お客様足下……なんて、そんなむつかしい事は藝者風情の妾等には書けないから妾は妾の思ふ通りに書いて、厭やでも應でもお客様に讀んでお貰ひします。お客様。あなたがたは御酒を召しあがつた揚句にはいつも妾等に向ひ、何だ藝者の僻に生意氣だとか、さては淫賣だ不見轉だと、それは〳〵いろ〳〵の悪口ばかりおつしやるが一体あなたがたはどんな料見で左様な事をおつしやるのです。無論あなたがたはお客様で妾等はお金を頂いて招れる賤しい身分ですから何と云われても致方はないとあきらめて居ります、而かしお客様、妾等だつて矢つ張り切れば血の出る人間の端しくれですからね、餘り無茶な事ばかり言はれたくはありませんよ、お客様、あなたがたもお客だと云つて大きな顔して威張つて居られるが妾等に左様な悪口がよくも〳〵言はれますことね、あなたがたが醉拂つた時の事を

考へて御覽なさい、雨蛙が小便した時のよふな顔をして淫靡な歌を得意で唄ひ、最後の詰にはあの藝者を何ふだの恁ふだのと……あなたの鼻髯や洋服に對してはづかしくはないのですか、あなたがたが醉拂つた時の有様はマルで氣狂いの寄合ひ風癲病院そこのけの姿でしよふ、間には面白く遊ばれるおかたもあるが初めから喧嘩腰で遊ばれるおかたもある、初めから憎まれ口を叩いて御酒を飲んで亂暴しておまけに氣取屋のお客様。あなたがたがお歸りの時に後ろから妾等が赤い舌を出してアカチヤカベーをして居るのが見へないとはほんとに情けないお人よし様だよオホヽ……、大枚なお金を遣つて妾等を招んで遊ばれるより場末の飲食店で酌婦さんや女中さんでも相手にして遊ばれては如何ですか妾衷心から注告してあげるのよ。お客様、あなたがたが醉つ拂つて妾等の髪も衣裳もお構いなしに御酒を繰りかける事などお止しなさいよ、あなたがたが召していらつしやる夜店で買つた見切ものゝ反物同様に思つて貰つては甚だ以て迷惑千萬、眼の正月にしんから見ておきなさいよ、憚ながら京都高島屋の別誂へ、あなたがたの安月給の一と月や二た月分辛棒したつて買へませんからねゑ。お客様。お座敷で札入ばつかり光らかすのはお止しなさい見つともないよ、圓札が御守さんになりやあすまいし、あなたのお札を見んかつてお金が見たけりや銀行の口元に立つて居る方が氣がきいてるわ

後生大事にお紙幣と心中しないよふにしつかりなさいよ、遊ぶなら遊ぶよふにま少し淡白と遊びなさい、熱にうなされた病人のよふに眼の球ばつかり白黒させて、ほんとに見つともないよ。惡口御免。

左様なら。

【大正七年六月二十九日】

俥夫君に

田舍紳士より

俥夫君足下。吾輩齋戒沐浴して謹で一書を足下に呈す、チョイ〳〵車に乘りも爲得ぬ癖に一書を呈すなどゝは甚だ生意氣千萬なりと叱り玉はゞ早やそれまでなり。俥夫君足下。吾輩は足下の勇氣に對し常に深甚の敬意を表しつゝある一人なり、世人が暑いの寒むいのと不平をこぼして居る時に足下が暑熱を厭わず極寒を恐れず半纏一枚を引かけ韋駄天の如く疾走し玉ふ時の男々しさよ、寒むければ避寒休暇など稱して部屋の隅で火燵の中に足踏み込んで縮み上り、暑ければ避暑旅行などゝ勝手な名を

付けて靑息吐息で凉い處を追ひ廻る醜態をしながら、一日の運動會に僅かに一里か二里の道を驅走して異人の寢言見たよふなマラソン競走などゝむつかしい名を付けて大騒ぎを爲す奇妙な人間ばかり增て行く世の中に、獨り足下等が蠻骨凌々毅然として寒風暑熱の中に苦鬪す、吾輩が足下に多大の敬意を表する所以敢て此處に在り。俥夫君足下。足下の車上に客と爲る者八の字髯の紳士あり、パナマ帽あり金緣眼鏡あり、役人、商人、美人、御多福、片眼、跛足もあるならん然れ共髯の紳士必ずしも偉きにあらず、パナマ帽や金緣眼鏡なか〳〵に油斷ならず、裾模樣花やかなるハイカラ美人、紗の羽織の丸髷にも得て贅造物多く輓ける足下よりも車上の客にかゝつて品性下劣なるものもあるべし、然れ共足下は一視平等能く乘せ能く走る、足下の德や實に大なり。俥夫君足下、君輩頃日紳士振て車を驅れり、而して乘車の際其賃錢を極めざりしを以て先方に着して其賃幾何を支拂ふべきやを足下に問へり、然るに足下の曰く『へ、へー、思召で……』と、……而しながら田舍者の悲しさに吾輩は『へ、へー』が將して幾錢を示すの意なりや、『思召』が將して幾十錢の符牒なるやを知らず、吾輩は吾輩の思召し通り二十五錢を呈せんとせしに足下はジロ〳〵と吾輩の顏を眺め『旦那、まあ十錢なくだはりまつせ』と云へり、足下よ、思召と云へば客に對して賃錢は貴下の見込にてよろしと其金額決定權

を客に一任されたるものなり、然るに客は一任されたる權利によりて思召額を決定して差出せば之では足らぬと云ふ、思召なる語何と馬鹿々々しき無益の言葉にはあらずや、若し吾輩が最初に四十錢を差出せしならば足下は自分の思ひより五錢多いからとて返される筈なりしや否や、多い時には其儘とし少ない時には追求す而して之を思召と云ふ、世にかゝる虫のよき話あらんや。足下よ。此る曖昧なる言葉を弄せらるゝは蠻骨凌々たる足下の人格を傷くるの甚だ大なるものたるべし、足下以て如何とす、吾輩常に足下を敬慕するの餘り、茲に一書を呈して敢て足下の一考を煩す所以なり。霖雨去て暑熱を迎ふるの候益々足下の自愛を祈る。妄言多謝。

【大正七年六月三十日】

慈善行商人へ
田舍の青年より

慈善行商人足下。吾輩は足下の大なる名刺と足下の洋服と金緣眼鏡とに對して常に深甚の敬意を表しつゝある一人なり、吾輩は嘗て軍人と爲りて上等兵に昇進する事を得ず、歸つて村の區長たるべく希望せしも青二才の故を以て排斥せられ、天下の英才も遂に其敏腕を振ふの機會を得ず鬱々として娛まざること茲に數年なり、果然吾輩は足下を知るを得恰も百年の知己を得たるの心地し朝夕敬慕に堪へず、茲に肥料臭き手に鈍筆を執り謹で一書を呈する所以なり。足下よ、土百姓の吾輩が足下を知りしは△月△日なりき、吾輩野良仕事より歸りて馬小屋の隅に腰打掛け煙草一服の際、茶褐色の洋服にメッキらしき金緣眼鏡をかけて小さな旅行鞄を提げ門口より悠々と入り來りしは足下なりき。村の入り口の權太郎君は嘗て村會議員にまで出世せし有志家なるを以て時折洋服や鼻髯の役人等の來るを見る。然れ共百姓たる吾輩の茅屋には開闢以來未だ嘗て足下の如き偉き人の來られし事なかりき。吾輩は足下を以て裁判所若くは稅務署の役人樣と思ひ色靑くなる程叱驚したり、足下は吾輩に一瞥を與へて『君が當家の主人ですかね』と薄い髯を撫で廻はし大きな名刺を突き出して『僕は○○廢兵團の幹事ですがね、本會は廢兵救護の目的を以て創立されたものだが、洽く全國に出張員を派して所謂慈善事業の爲めに此の如き物品を販賣するのです、エー石鹼筆墨齒磨粉淸凉丸、何か一品ぜひ買つて貰いたい、此墨一本が三十錢淸凉丸が一服五十錢、慈善的に何かぜひ買つて貰ひたい』と言はれし

時には吾輩再び叱驚しぬ。富山の藥賣は柳行李を脊負ひ石鹼齒磨などの小間物賣は重ね箱を脊負ふて歩くに、今や洋服に眼鏡而も鼻髯を生やし君僕の友達言葉で鞄を提げて田舍の隅々を慈善的に販賣せらる、偉大なる哉足下、慈善の叫びを此山奥の片田舍に宣傳せらる足下の勞苦察するに餘あり、足下が販賣せる三十錢の墨は文林堂五錢の品よりも品質良好なるべく、足下の清涼丸は服んでも毒にならぬだけの効力は確にあろべし、こは吾輩の信じて疑はざる處なり。吾輩は國家の爲に最も名譽ある負傷を爲し遂に廢兵と爲りし帝國幾千の將士が足下等の如き大慈善家によりて救われつゝあるを思ふ時、感激の情迫り熱涙滂沱禁ぜんと欲するも能はざるなり、足下よ、若し吾輩に鴻池の財あり三井の産ありしならば足下の石鹼一個に對し千圓の金も惜まざりしならん、然るに吾輩最も貧乏にして此時些少の蓄財もなかりしを以て足下に對し再三固辭せり、然るに足下の曰く『三十錢や五十錢の金の無い譯はない、見れば君は青年だろふ、青年ならばこんな慈善的のものは率先して買ふのが當然でせうそれでは一對十五錢の此筆でもよろしい、買つてください』と吾輩幾度か辭すれ共足下は遂に之を許さず、爲めに吾輩は愚父が草鞋を作つて賣溜めし金より十五錢を投じて慈善的に遂に二本の筆を買ひ而して足下のお蔭によりて吾輩も日本に於ける慈善家の一人と爲るの光榮を有しぬ。冀くば足下よ

吾輩をして慈善行商人の一員に加へられん事を。吾輩は足下の如く雄辯ならずと雖も威たけ高に百姓等を睨み付ける點に於ては或は足下の以上なるべし、茲に謹で足下に敬意を表し併て足下の所持せらるゝ筆墨石鹼が大に賣れて毎晩宿屋に於て益々贅澤せられん事を切望す。野人禮を知らず亂筆多謝。

【大正七年七月一日】

馬車輓君に
馬車馬より

馬車輓君足下。吾輩は馬車馬なり、吾輩は阿蘇の山奥に生れ馬喰君の手によりて轉々各地に賣られ大枚八十圓を以て足下の破れたる馬小屋に入り足下を主と仰ぎてより早や一年有半、此間に於ける足下の高恩は吾輩の肝に銘じて只管感謝の念に絶へざる處なり。足下よ、吾輩の体軀は恰も骨と皮とにて製造したるが如くに痩せたり、其脊中より臀部にかけて突兀として突き出でし骨は宛然日本アルプス山脈の如くなり、吾輩は此痩軀を以て足下の命を奉じ日々千斤の荷馬車を輓く、足下に於ては定めし

面倒の事なるべしと信じ朝夕恐懼措く能はざる處なり、馬車輓君足下、吾輩は此處に感謝の意を表すると共に賢明なる足下に對して一言を呈し敢て足下の一考を煩はさんと欲す。足下よ、足下と吾輩とは霖雨連日鬱陶敷き位の事は屁とも思はず、泥濘膝を沒する如き大津街道を日毎に往復しつゝあり、吾輩は足下を唯一の主と仰ぎ足下の命は以て九鼎の重きに比し曾て一言の不平を述べず瘠軀の續く限り足下の爲に働きつゝあり、然るに足下は何故に吾輩を此くも慘酷に叱咤打擲し玉ふ事の甚しきや吾輩の臀部アルプス山脈の麓を見られよ、打撲の傷は宛然天然痘患者の如くならずや、足下が『コン畜生、此野郎』などいぎたなく罵り叱咤し玉ふ位の事は吾輩の馬耳之を東風に聞き流し得べし、されど車輪を沒する梅雨あがりの泥濘に數百貫の荷物を積んだる馬車はさながら巖の如くに動かず、此る時に足下の鞭は遠慮會釋もなく吾輩の臀部に急霰の如くに來る、肉を削るが如き其苦痛は骨髓に徹すれども悲哉吾輩は足下に向つて一言の不平を訴ふる能はざるなり。人類は最高の動物と云ふ、之れ人間が吾輩等畜生と異り勇にして智あり仁を知るを以てなり、馬車輓君足下。足下は吾輩の臀部を血の出るよふに叩く位はものかは氣に食はねば妻君足下の頭でも打叩く程の勇あり、足下は饑へたる妻子が足下の歸りを待ちつゝあることを忘れ、偶々得たる運賃を青樓一宵の夢と費消し、宅に歸つて妻

君を甘々と欺す程の智あり。而も平然として吾輩等畜生を虐待するは之を以て仁と稱し得べき、人道に叶ふものと思料し玉ふや否や。馬車輓君足下、足下が宅に歸つて『嬶早く一本つけんか』とて一瓶の酒を味ひ玉ふ時、吾輩は汗にまみれたる瘠軀を破れたる馬小屋の中に横へて主人に對する今日一日の勤めを漸く無事に終りし事を神に對して感謝するの時なり。足下よ、吾輩は畜生の分を知るを以て決して我慾を言はじ、されど足下が途中の茶小屋に腰打かけて一合の酒を傾け玉ふ時に『お前もさぞ疲れたろふね』とのやさしき一言と店頭に曝せし豆腐の粕の一塊位を惠まれしとて敢て足下の人格と經濟に關する程の事もあるまじと信ず。吾輩は多くを語らじ、切に賢明なる足下の同情心に訴へ併て將來の愛顧を願ふと共に足下の爲に益々奮勵努力せん事を盟ふ。亂筆多謝。

【大正七年七月二日】

大正十五年十月十五日　印刷
大正十五年十月廿五日　發行

壹圓紙幣物語【非賣品】

熊本縣下益城郡砥用町大字三和六八
著者兼發行者　廣瀨嘉一

東京市日本橋區濱町三丁目五番地
印刷人　堀洋三郎

印刷所　人文社印刷所

版權所有
不許・複製・轉載

549
145

終